
3 2 R 紅き牙獅子は転送事故に啼く

二代目斬風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3 2 R 紅き牙獅子は転送事故に啼く

【Nコード】

N 5 5 1 5 Z

【作者名】

二代目斬風

【あらすじ】

何の因果かメタルマックス3の主人公に生まれ変わってしまった転生者。気付きもしなかった過酷な宿命に翻弄され、時には自由のために、時には女のために、何よりもクソ美形 グラトノスへの復讐を果たすためにと戦い、そして自らの因縁に決着を付け、ジャガンナートの転送装置から緊急脱出したはずだった……のだが、何の因果か2Rの舞台へ転送事故だと！？ そんなバカな！

00話 ぶろろーぐ的なモノ（前書き）

- ・MM2Rをやったたら転送装置からヤツが出てきたのでムラムラしてやってしまった。
- ・こちらは気楽に一人称ベースで書き殴って行きたいと思います。
- ・ぶっちゃんけテンプレでスマンこっす。

00話　ぶろろーぐ的なモノ

息を切らせながら、セキュリティが死んだ艦内を全力で走る。

俺と共に、恨み骨髓の怨敵と戦い続けてきた相棒も、既に甲板へと放棄された。
グラトノス 魔改造チヨッパ

何者の意図か、この荒れ果てた世界で唐突に”前”の記憶に目覚め、自分勝手に地獄へと突き落とされたかのように思い込みながら荒んだ少年時代を送っていたという、何とも黒歴史溢れる頃からの相棒だった。が目的地である転送装置の場所にまでは連れて行けない。

奴によって化け物へと変えられた俺も、流石に車載兵器と装甲タイルでゴテゴテに武装したクソ重い相棒を担ぎ上げて人間用の梯子を登ることはできないし、そもそも如何に特殊合金製であろうとはいえ、人間用に作られた梯子がこの世界の在り得ない重量を誇る戦闘用車両の重さに耐えられるとは思えない。
ブレード・トゥース クルマ

親交のある芸術家に、目の玉が飛び出るほどの報酬と、極めて入手の難しい超希少金属を提供する事で、超改造に超改造を重ねてもらった二つの超兵器を愛車ごと失うのは血の涙を流すほどに口惜しいが仕方が無い。
アーティスト スーパーレアメタル 7mm機銃モーターパック

ないない尽くしの中、相棒に固執したあげくトウアハー・デ・ダンの級の巨大潜水艦の自沈に付き合わされ、原子炉とガスタービンの大爆発に巻き込まれるなどノーセンキューである。

俺も、色々と物理常識を吹っ飛ばしている自重しない世界の住人
メタルマックス

とは言え、流石に水圧に潰された拳句、核爆発と水蒸気爆発に巻き込まれながらギャグ時空よろしくアフロになるだけで済むとは到底思えないからな。ここはグラトノスの目的を潰して全てを御破算にしてやった代償として諦めざるを得ない。

世界に蔓延^{はびこ}る悪党どもや<ノア>と戦うための切り札にもなるであろうジャガンナートを、グラトノスの目的を潰すためとはいえ破壊してしまったのは極めて遺憾だが……まあ、済んでしまった事は仕方が無いよね！

赤色灯が点滅し、自爆カウントダウンを読み上げる電子音声と、非常事態を示す警告音が渾然と響き渡る廊下を駆け抜け、非常時の脱出用であろう転送装置のある小部屋へと飛び込む。

艦内を徘徊していたバイオモンスターの姿も今や見えない。破滅を決定付けられた艦^{ふね}から逸早く逃げ出したのであろう。

「つとと、ここだ……転送準備スタンバイ。急げ、急げ……」

慌てず、しかし急いでコンソールを操作する。行き先は慣れ親しんだワラの町。

完全に内部の電源が死ぬ前に、転送プロセスを終了させなければジ・エンドだ。

緩やかに……だが確実に傾斜を始めた船体によつて装置から放り出されないように必死でバランスを取りながら、ただただ祈る。

そして、装置が遂に翡翠色に輝き、テスラコイルが猛然とプラズマを放ち、とうとう時空間を貫くワームホールが顕現する。

（　生き延びたッ！　ざまあみやがれグラトノスッ！　）

転送される時の閃光と、自意識が遠くなるような感覚に包まれながら、俺は内心で勝利の雄叫びをあげたのだった。

<ERROR！

<ERROR！

<ERROR！

<転送中二予期セ又障害が発生シマシタ！

もちろん、俺がこの残念な事実を知るのは後の事になったのだが……何故だ！ あれか？ 生き延びたツと思ったからフラグでも立ったというのか！ ド畜生！

まあ、こういう締まらない理由で、俺は《ジャツジメント・バレ―》から強制的にオサラバさせられてしまったのである。

01話 izzはizzですか？（前書き）

主人公（笑）揃い踏み

01話 ここはどこですか？

「……ん？　ここは、どこだ？　ワラに戻った……訳では無さそうだな」

眠りから覚める前のような浮上感と共に、転送後の見当識喪失から復帰した俺は、自分でも判るであろう程に怪訝な表情だったに違いない。

沈み逝くジャガンノートから転送装置で無事に脱出できたはよいものの、周囲を見てみれば何時ものガレージ地下のコンクリ部屋では無く、床にはハイ・セラミクス製と思われるタイルが敷かれており、壁も鉄板による補強。送電パイプもワラのそれと比べると劣化が薄いように思える。

近くに置かれている神話公司製の管理端末も見慣れたものではなく、何よりもそこには俺のほうを見て、驚きの表情を浮かべている金髪青眼の少女がいた。

「あ、あんた誰！？」

「オーケー、落ち着け金髪少女。ひょっとして転送は初めてかい？」

まだ慌てる時間じゃない……とばかりにニヤニヤしつつ言うてる。

黒いレザービキニと、隠す気があるのかと疑問を感じるレベルのこれまた黒いレザースカート。トドメとばかりに絶対領域を演出する膝上までの黒いサイハイソックス。

無法の荒野を往くような女性としては明らかに問題であろう、露出過剰な服装を、臙脂色をしたハンター御用達の外套コートで隠している。年季の入ったそれは随分と長らく愛用しているのだろう。所々が破れ、あるいは焦げ付き、片袖なぞ肩口から無くなってしまっているのに、みすばらしい印象は無く、むしろ歴戦の風格すらあった。

肉体的には、スレンダーながらも出るべき所は程よく出ており、出て欲しくない部分は薄らとついた筋肉によって余分無く引き締められているという、妙齡の女性が見たら嫉妬に駆られそうな若さに溢れる肢体。

腕は細身ながらも弱さを感じさせず、すらりと伸びた脚はまるでカモシカの如くという比喩表現がよく似合う。

まるで太陽のような生命力に満ちた勝気そうな美少女（重要）が、あんな衣装を着こなしている……そうになると、つまり、まあ、何だ。若さ溢れる肉体を持つがゆえに、視姦ニヤニヤしてしまいたくなる気分も判って貰えると思う。

「……何だろう。凄く目付きが気に入らないんだけど？」
「そいつは失礼。だが生憎これは生まれつきだね。それは兎も角、俺はジン。恐らく転送事故でここに来た。悪いがここはどこの町なのか教えてくれないか？」
「そういう意味じゃないんだけど……まあいいわ。私はレナ。それで、ここはエルニニヨの地下よ。あんたは私が転送装置の電源を入れた途端に出てきたの」

なるほど。そりゃあ驚きもするわな。
電源を入れたと思ったたら急に作動して、顔に刺青（？）した男が

出現などしたら普通は驚く。むしろ悲鳴を上げなかっただけ凄いかも……

「……って、エルニニヨ!?」

「そう。エルニニヨ」

エルニニヨって……俺の記憶が確かなら、いわゆる二作目が出てきた場所だよな? つまりく大破壊>後な地名では、アシッドキャニオン。

過去、地球救済プロジェクトのために日本に移住したバイアス・ヴラドが日本のある山間地を買い上げ、計画研究都市やら別荘やら自然エネルギー開発やら石油生成プラントやら当時でも騒ぎになるようなレベルの事業をアレコレやらかした場所、とクソ美形グラトノスに洗脳されていた頃に聞いた記憶がある。

一応、文明が維持されていた時代からの転生者である俺は、そこそこにインテリだったせいで、クソ美形グラトノスに気に入られ、冷血党時代に、吐き気がする事極まりない研究の助手として扱われたりく大破壊>前の科学技術や歴史を学ぶ機会に恵まれた訳だが、それでも奴に感謝の念など抱きたくも無い。

まあ、俺の過去など、この際どうでもいい。

そして、諸君(?)も今の話で気がついたと思うのだが……そう、ここって日本なんだヨネ。んでもって、今まで俺が生きてきた今生の故国はユナイテッド・ステイツ。わお、大陸を跨いで転送事故とありえないーい!

内心で激しくテンパっているが、微妙に鉄面皮を維持する我が面

貌。とりあえず少女……いや、レナに礼を言いつつ端末を調べる。

「で、何してんの？」

「……転送履歴を調べてるんだよ。普通は転送事故が起こっても履歴を辿ったり、改めて目標場所のアドレスを入力する事で戻れるからな」

「へえー。そーなんだ」

「そーなのだ。残念な事に俺らが使うような転送装置では、電力の都合もあつて行ける距離が制限されているけど……ちなみにく大破壊>前の首都近郊には国際転送ターミナルってのがあつたらしくて、その転送装置なら海を越えて別の大陸とかにも一瞬で行けたらしいよ。まあ、使うためには厳しい審査と馬鹿みたいな高額料金を取られたそうだけどな」

「ふーん」

「ぶっちゃけ、信じられんイレギュラーで大陸を越えたようだ……この転送装置では出力不足で帰れないという衝撃の事実が判明した！」

「その割には余裕そうね……ま、ご愁傷様とっておくわ」

「ご愁傷様の割には、慰める気など無いと言わんばかりの態度のレナ。正直、俺としても慰められるとマジなレベルで落ち込みそうだから助かる。」

今回の原因は、要するに自爆間近のジャガンナートが内部電装系や転送装置のキャパシタに過剰な電力を流し込んだせいだろうと考えている。

どちらにしても、対ノア兵器の出力を以ってして正に地球の裏側といった距離を越えさせられてしまったのだから、どうしようもない。

帰るためには、件の国際転送ターミナルが生存している事を期待しつつく大破壊>後の荒野を流離い探す必要があるだろう。飛行機や巡洋艦的なものを探すのも手だが、正直な所、メイド・イン・ノアの巨大生物兵器とか浮遊要塞とか訳の分からないキワモノに狙われるような気がしてならない。

どうやら、どのような選択肢を選ぶにしろ、俺はこの地でハンターとして活動しないとならないようだ……

「つか、俺の戦車コレクション……無事なんだろうか」

猛烈に不安だが、向こうには無線ポストも無い以上、手の出しようが無い。衛星システム経由ならハンターオフィスに連絡ぐらいは取れる……か？ まあ、取れたとしても、帰るまでに長い時間が掛かるようならオフィスのほうでレンタル連合あたりに運用させるんだろうなあ。

ハンターオフィス預かりになってしまえば、幾らエンジンロツクに起動キー、Ｃユニットによるセキュリティが施されてても、改造屋にヤッてもらうんだろうし……あああ、くそっ、気になってたまらん！

何？ コーラやシセちゃんに連絡を入れないのだった？ 期待させて済まないが、あの頃はグラトノス対策に集中し過ぎたせいで、コーラとの熱いラブロマンス……なんてネチョい要素など入り込む余地が無かったんだよ！

シセちゃんにしても、相棒^{チョッパー}がミンチの所のイゴールに俺ごと回収されたせいで、バイク引き上げの事故から身を挺して助けるなんてヒロイックな展開も無かったし、むしろ関係性そのものが薄いわ！

ああ、なんかもう、言ってるだけで悲しくなってきた……

へん！ いいさいいさ！ こうなったら、こっちでも人が羨むような戦車コレクションを集めてやるんだからな！

ちなみに……あのレナという少女が「原作」の主人公に当たる存^{ハンター}在だという事を知って愕然とするまで、あと少し

01話 ここはどこですか？（後書き）

・そう簡単に帰ってもらっちゃ困るので転送装置の設定を捏造（爆）

02話 はんたーはんたー（前書き）

・この少女……実に腹黒い（笑）

02話 はんたーはんたー

side レナ

メカニック
修理工のナイル爺さんが、ガルシアのバギーを修理するって言うてエルニニヨまで行つたと聞いてから歩きで半日。

あの日の記憶に苛まされながら悶々としていた私は、リハビリと修練がてらに雑魚を狩りながらエルニニヨまで足を伸ばしていた。流石に生身でスナザメと戦う気なんて無かつたので砂地には近づく、ハトバ方面とこの辺りを分断する溪流沿いに、北上すること20〜30km……何とか日暮れ前に到着してホッとしたのも束の間。

エルニニヨはグラップラーの連中が我が物顔で闊歩していました。どやっ！

って、ふざけんじゃないわよッ！

マリアとマドに向かった時は、急ぎの依頼だった事もあって、エルニニヨに寄らず直行だったから気付かなかつたのね……ガッデム！

町中は荒らされてまではいなかったものの、腐れ野郎どもがやりたい放題……宿屋で一泊しようかと思つたら、受付では「えへらえへら」と気持ちの悪い笑みを浮かべているグラップラーの連中が何故か立っているし、私のようなうら若き美少女が一人で泊まれるなんて環境じゃ無い事は明白だった。

諦めて酒場で夜明かしでもしようかと思つてみれば、やっぱり連中が酒盛りしてやがる。それだけでも飽き足らず、外ではチンピラとしか言いようの無い下っ端が、どこかのオッサンを恐喝してるわ、

汚いモノを曝け出して堂々と立小便しやがる汚物野郎までいやがる始末！

思わずマリア直伝の必勝堂々と不意打ちの法則で殴り飛ばしたくなった……とい
うか、むしろ私の得物ショットガンで消毒してやるうかとすら思ったぐらいだ。
何にしても、あんな連中の同類に私の両親やマリアが殺されたの
かと思うと憤死したくなるぐらいの怒りに駆られてしまいそうにな
るが、必死に抑えた。抑えきってやったわ。

……まだ早い。コイツらを掃除して、台所の黒光りするGのよう
にいる有象無象どもを蹴散らして、あの怪物をマリアと同じように
グチャグチャのケチヨンケチヨンのケシズミにしてしまえるだけの
力を蓄えるまでは我慢だ。

喧嘩で殴り飛ばす程度なら兎も角、町を支配しているグループ
ーを見る端から駆除殺してしまっただけは、それこそ草の根を掻き分ける
かのように狙われ続けて、ネズミのように身を隠さなければならな
くなってしまふ。そうなればマリアや両親の仇を討つなど夢物語に
なってしまうだろう。

そう、自分を誤魔化説得しながら、私は安全そうな仮宿を探す事にし
た。

……驚いたつてもんじゃなかったわよ！

ええ、私が何を言ってるのか判らないかもしれない。だから、
大破壊>前から受け継がれてきたお約束を言うわね？

仮宿を諦めて、転送装置を使ってイリットちゃんの所に戻ろうと
思い、転送装置の電源を入れたら、何も操作してないのに、どう見
てもヤバイ系統の人が転送されてきた……な、何を言ってるのかわ
からねーと思うが、私も何がどうなったのかわからなかった……

「あ、あんた誰!？」

だから、私が思わず上擦った声で誰何してしまったのは仕方ない
事だと思うの。

そいつは、炎のように鮮やかな真紅の髪と、紅玉石のように透徹
していながらも何故か鮮血のイメージを抱かせる赤い眼をした男だ
った。

顔立ちはそれなりに整っているけど、こつ……何と言つか、仏頂面が張り付いてしまっている感じで、言ってる台詞の軽さの割に表情の変化が乏しい。慣れないと怖さを感じるタイプね。

何の飾りか呪いかは判らないけど、右目を経由するように一本。左目側には三本の赤いラインが走っている。そのラインが気付けなほほどに微かにだけ、薄らと発光しているように見えるのは私の気のせいだろうか。

目にかかる髪の毛が邪魔なのか、額にはくすんだ緑色のバンダナ。アーミーカラー 瘦身に見えるくせに、服の下からでも判別可能なほど鍛え上げられた身体には迷彩スーツに怪力手袋、とどめにクラッドブーツ……

何てことなの……バンダナは別として、他は全部高級品じゃない！ あ、よく見るとボロボロに見える外套コートも戦車長仕様のビンテージい？ 考えてみれば持つてる武器も強そつな軍用銃だし……何？ これつてモヒカン怪人に装備を焼き尽くされて、泣く泣く散弾銃ショットガンとアサルトナイフで頑張ってる私に対する挑戦か！ 挑戦なのね！？

「……何だろう。凄く目付きが気に入らないんだけど？」

ふと気がつけば、互いに無言でお見合いしているような状況となつている事に思い当たり、私は機嫌を悪くしたかのように振舞つてみた。

が、彼は別に気にした様子も無く軽口交じりに肩を竦めて見せるむう……何か腹が立つけど、私も都合の悪い事は忘れたいので流す事にした。

彼の主張を信じるとするなら、彼……ジンは転送事故によって別の大陸からエルニニヨまで飛ばされてきたそうだ。

普通ならすぐに帰れるんだけど、大陸（って何？）を越えるような転送事故はイレギュラーだそうで、私達が使うような転送装置では帰れないらしい。

ジンの説明には多分に専門用語らしきものが混じっていたので、私に理解できる部分だけを纏めたら上のようなになった。

うはは。まあいいのよ！ 私は専門家じゃないんだから。それに、真実か虚言かはこの際どうでもいいかもしれない。

むしろ偶然とはいえ、凄腕っぽいハンターと知り合えたんだから、ここは色々と世話を焼いておいて、彼には私の復讐を手伝ってもらおう。

まだ少ししか話していないけど、それでも彼の本質には私に通じるナニカを感じるし、外道や悪党の類でも無さそうだから。

マリアのように無条件で信じられる訳でもない。
フェイさんのように義理堅い訳でもない。

アパッチさんのようにプロの矜持を持ち合わせている訳でもない。

それどころか、近くにいると逆に身の危険を感じそうな賞金稼ぎモドキとチームを組むより万倍マシだろうし、私のような歳若い女

ハンターに対する態度にしても外見に反して柔らかい。

時に視線にやらしいモノが混じっている気もするけど、今までに見てきた連中と比べれば紳士的な範囲内だし、過剰に嫌悪感を抱かせるような生々しい感情も飛ばしてこないし……あれ？ もしかして、これ……超優良物件？

どこかで実力が近くて、気の置けなさそうな同性のメカニクやソルジャーと組もうと思ってたけど、もうこれは天佑だよねっ！

フフフ……絶対にオとす……フフフフフ。

02話 はんたーはんたー（後書き）

・けだものハンターをハンター少女がハントするやうですw

03話 TS? なにそれおいしいの? (前書き)

・うーむ、短い。まあ繋ぎみたいなものってことで。

03話 TS? なにそれおいしいの?

(おおう、何だか妙な悪寒が……)

あれからレナに話を聞いたところによると、現在このエルニニヨはグラッブラーが幅を利かせていて碌なものじゃないらしい。

宿泊施設ではまず確実に人攫いでも企んでいる勢いだし、町を歩いているだけで厄介事に巻き込まれたりする可能性が高いとか。

なんとまあ、一子相伝の暗殺拳を伝承している世紀末救世主が放浪している世界かと突っ込みたいレベルの混沌ぶりである。

ある意味で原作通りなのだが、あらためて聞くと本当にとんでもない世紀末っぷりだ。

「もう夜が近いし、よければ一緒にマドまで来ない? タダで……
しかも安心して休める場所があるわよ」

「……マドか。どの辺りになるんだ?」

「エルニニヨから南西に向かって川沿いに20〜30kmほど行つた所にあるわ。ま、私のiGoogleに地図情報が記録されているから転送装置で直ぐ戻れるけどね」

それとも、転送装置を使うのが怖いならレンタルタンクでも借りて行こうか? と小悪魔的な表情で問いかけるレナに「転送で構わないさ」と答えて苦笑する。

事実として、今回の大陸間を越える誤転送はジャガンナートが原因で間違いは無い筈だ。エルニニヨの転送装置が突然どこからか莫

大な電力を受信して暴走する……というイベントの発生率など寸毫^{すんごう}の確率ですらあるまい。

「ふーん。ま、いいけどね」

からかうという思惑を外したか、少しばかりガツカリとした様子のレナが装置端末を操作し始める。

俺は、その様子を眺めながら「なに、レナも転送を使ってたら何回も事故に出くわすだろうから自然と慣れるさ」とニンマリとしながら付け加えたのだった。

「……ついたわよ」

「事故が起こらなくて残念だったな？」

「くううう……ムカつく！」

先程の冗談に加え、俺という転送事故の実例がいたせいか、レナは奇妙な緊張感を醸し出しながら転送ポッドの台座から降りる。

当たり前だが、転送事故はそう簡単に発生するものではない。仮

「ここで事故が発生していたら、俺は真剣に言霊フラゲの存在を信じた
らう。」

転送事故をネタに軽くからかった心算つもりが、逆にからかわれる破目
になったレナは地団駄を踏みはじめそんな勢いで憤慨していたが、
「……これで勝ったと思わないことね！」と指を差して宣言してい
た。実にからかい甲斐可愛らしいのあるやつである。

転送装置が設置されている地下室から階段を上ると、そこはボロ
ボロに朽ち果てた廃墟手前のビルの中だった。

レナの言った通りに日も暮れかけており、隙間から見える空は夕
陽の赤を通り越して、宵の群青に差し掛かっている。

そろそろ店仕舞いにでもする気が、人間道具屋の店主であろう青
いツナギを着込んだ男が売り物が納められた木箱に鍵を掛けてまわ
っていた。

「この建物はマドで一番古いんだってさ……まあ、イリットの受け
売りなんだけどね」

ひらひらと手を振りながら触り程度に説明し、ツナギの男に会釈

だけを済ませると、扉自体が失われたのかポツカリと開いたままの
出入り口をくぐって外へとでる。

進入禁止用の黄色い車止めをすり抜け少し歩くと、そこにはちょ
つとした町工場といった規模のガレージが建っていた。

薄暗い町中において、文明の光に照らし出されたソレは近くに立
ち寄った人間に、強い安心感を与えてくれる事だろう。

「はい。ここよ。私もお世話になってるナイル爺さんのガレージ。
二階に大きめのロフトがあるから、今日はイリットに頼んで泊めて
もらいましょう！」

俺のほづを振り返って、満面の笑みで両手を広げるレナ。

もはや疑問を抱く余地もない。

彼女が、この地を巡る復讐劇の主演女優だったのだ……

……え？　これってTS??

03話 TS? なにそれおいしいの? (後書き)

・ジンさんはMM2Rの事など知らなかったのだ! たぶん(笑)
・次回、いきなり男を連れ込むレナにイリットが! ……嘘です。
すんません。

04話 むりげーこつりゃくずみ（前書き）

戯言：今日は1話だけ。うむむ……そろそろ変態学者のほうも進めるべきか？

- ・ジンさんが仲間になった！
- ・ジンさんの無理ゲー回想録（お

04話 むりげーこつりやくずみ

「「ごちそうさまでした！」」

「はい お粗末様でした」

宿を貸してもらった上に、心の籠った手料理朝ごはんまで頂戴ちょうだいさせてもらった俺とレナの感謝の挨拶が重なる。

そんな俺達を、どこか微笑ましさすら感じさせる眼差しで見てから感謝の言葉を受け取ると、彼女……イリットは年季の入ったシンクで洗い物を始める。

正直、この生き馬の目を抜くというレベルを超えた弱肉強食の荒野において、ありえねーと叫びたくなるほどに純粹で人の好い娘さんだった。

最初は、どうしても原作MM2のイメージ赤髪ツインテを抱いていたせいか、黒い二又のおさげ髪に浅黒い肌の彼女を見て、イリットだという認識を持つのに苦労したが、もうそんなの関係ないねッ！ 原作だの関係無く彼女は良い娘だと、このブレード・トゥース様が認定するがーんッ！

……うん。昨日みたいにイメージからかけ離れたイリットをガン見し過ぎて、イリットを脅えさせるのは困るからな。

まるでイチヤモンを付けるヤクザと脅える美少女といった光景に、空気を読んでくれたレナが、切れの良いツツコミを炸裂させてくれなければ今頃どうなっていた事か。

くっ、初対面の割りにレナの対応が普通すぎたせいで、一般人からしてみれば俺は悪党面スジモノだという事実を忘れていた……無念ッ。そ

して、レナの奴には俺から”ツッコミマスター”の通称を与えてやるうと思う。

「レナさん。ジンさん。お弁当……どうしますか？」

「ありがたく受けて取らせていただきますっ！」

いやー、ホンマにええ娘さんや！。

もう直角に曲がらんばかりの勢いで俺とレナはイリットからスタミナ弁当を受け取ったのだった。

……しかし、この行動といい先日の対応といい、何かレナは他人という気がせんなあ。

「んじゃ、私はナイル爺さんの所でバギー受け取ってくるから」

「OK。俺はちよつと寄りたい所があるから、後でハンターオフィス前で合流しよう」

「わかったわ」

お互いに軽く手を振り合って別行動を取る。

流れの通り、レナはバギーを修理していたというナイル爺さんの所へ向かい、俺は少しかり気になる事があったのでガレージを後にした。

昨夜、寝物語　とは言っても事後や艶めいた話では無く、本当に寝ながら話したただだが　に、レナからこれまでの経緯を聞かされた俺は、ハンターとしてはヒヨッコな彼女に協力して行動する事を決めていた。

どの程度の期間になるかはわからないが、暫らくはこの界限で生活しなければならぬのだ。近場で狩りをして稼ぐにも、依頼をこなすにも、人間狩りなどという蛮行をしている勢力を放置したままでは落ち着かない。

それに、俺と同じように”復讐”^{ははか}と言う名の魔獣^{マクマ}を心に飼っているであろう彼女を独りにするのは憚られた。

(……俺みたいに単独でラスボスに挑むような真似はさせたくないしなあ)

心の中だけで呟く。

俺は、冷血党^{クラン}との戦いの中で、様々な連中と共闘した。

時にはヌツカの酒場で同行してくれた気の良い連中と旅をした事もあるし、克蘭に敵対するレジスタンス^{煮え菜山子}に協力した事もある。

が、如何にゲームのような非常識に満ち溢れた世界とはいえ、クレイジーとしか言いようの無い行動に付き合ってくれるような、ネジの吹っ飛んだ馬鹿には出会えなかった。

そりゃあ考えてもみてくれ。

より安全に。より効率的にモンスターや賞金首を狩るため、チームは組まれるのだ。

冷血党^{クラン}の賞金首を狩るために共闘するなら、割と多くの賞金稼ぎ達が協力してくれる。

だが、断崖絶壁の上に侵入するためにマストライバーの射出ポツドに生身で乗り込んで飛ばしてもらおう……なんて自殺としか言いようのない手段にホイホイと着いて来てくれる訳がない。

結果的に俺は単独で……しかも生身で高地のモンスターどもと殺り合う事になったし、ネツイブ・メラハの攻略も、冷血党^{クラン}の本拠地^{グレートノス}しかも複数の高額賞金首や真性の化物^{ゴッド}までいるという情報をハンターオフィスから仕入れでもしたか、自殺（確かに無謀だ。常識的に考えれば）には付き合えないと断られる始末。

冷血党^{クラン}へのリベンジに燃えるく煮え案山子^{レベル}の連中なら、死を覚悟で付き合ってくれただろうが、あっちの連中は力量に不安がありすぎたからなあ……

正直、ドミングスやアルメイダと正面きって戦えない時点で、ハイ・ウォーターに連れて行くなど論外です。

ま、そういう訳で、究極^{魔改造チヨッパ}の相棒を共に独りで何度もネツイブ・メラハに挑む俺には、“自殺志願のハンター”なる通称すら付けられたぐらいだったさ。

この時ばかりは、今は亡きオズマの爺様が「イヌは良い……」と頻りに主張していたのに同意しなくなったよ。

……俺、イヌ苦手だけだな。顔を舐められるのとか勘弁してください。

それはさておき。

単独でラスダン及びラスボスに挑む破目になった俺だったが、実はコーラがグラトノスに拉致されるというイベントが無かったので、ネティブ・メラハ周囲の損害を気にせず、常時全力で戦えるようになった事だけは幸いだった。

そも、俺はグラトノスに殺された後も記憶と復讐心を失わなかった。

その影響か、わがまま娘コーラとの付き合いが薄かった俺は、復讐の遂行を最優先に行動してしまったため、カスミさんの農場と繋がりを持つことも無くなってしまった。

結果、ルーンシズろくでなしどもに、ブレード・トゥース生き返った死体が農場に出入りしている事を掴まれるイベントが消失。

ついでに、オズマ魔犬の爺様のところで、コーラがグラトノスに攫われるイベントも連鎖消滅。

コーラ彼女にとっては幸いなる事に、今でもカスミさんと一緒に平穏な暮らしを営んでいるだろう。

話が逸れすぎた
閑話休題

つまり何が言いたいのかというと、中途半端にリアルなここでは、あらゆるリスクを許容した上で、どんな場所にも主人公に同行してくれるような仲間など、まず見つかる筈が無いという事だ。

無論、同じ意思……この辺りなら、グラップラーに深い怨恨を抱いており、更にグラップラーを壊滅させるなら命すら惜しまない、ぐらいなレベルの存在がいたら、そいつは最期までレナに付き合ってくれる最高の仲間になってくれるだろうけどな。

むづ……原作のモヒカンメカニック機械工は無理そうだよなあ。確か家族持

ちだし。無鉄砲女戦士なら可能か？ 確かグラップラーに家族を殺されたんだっけ？

「最低一人は“仲間”を得られるか」

どうやら彼女はスーサイドな経験をせずに済みそうだ。
心配しすぎかと苦笑を抑えながら、俺は目的地へと足を向けた。

そう、今、マドに居るといふ変人の所へ……

04話 むりげーこつりゃくずみ(後書き)

Q:あれ? 何でミンチが来てんの? つか何でここにいの?

A:さあ……なんでなんだろうーねえ

答えるよ!

05話 どくたーみんちに逢いませう（前書き）

明日は市役所に行かなければ……

忙しいのに気がつけば駄文を投下してしまうw

……それにしてもメタルマックス系二次って需要薄いなあ（笑）

05話 どくたーみんちに逢いませう

過去、俺が冒険と復讐の旅をしていた赤茶けた荒野で、それなりに立派な研究室を持っていた自称・電撃蘇生学の権威ことドクター・ミンチ。

ジャッジメントバレーにあったショッピングモールの廃墟、通称クライングママにいた頃は、曲がりなりにも研究室と呼べる設備だったのに、このマドで居を構えているのは、やつつけ仕事で建てられたようなテント。

「……随分と落ちぶれたなあ、爺さん」

ソレを見て、思わず口から零れ落ちた正直な感想にミンチの爺さんは血管を浮かび上がらせながら声を荒げた。

「やかましいわっ！ それより小僧。おぬし生きとったんか？」

「はあ？ 電撃棒で遊び過ぎてボケでも誘発させたか？ この立派に伸びた二本の足を見てみるよ」

「この減らず口といい、赤線入った顔といい……ふむう、本物のようじゃの。三年も姿を見せんと思っとつたら、海を越えておったのか」

「……は？ 三年？ 爺さん何言つてんだ？」

「おぬしこそ何をトンチキな……もしま、蘇生の影響で若年健忘でも発症したか？ それとも外的損傷の再生手術に使った治験薬に副作用でもあったんか？ うーむ……」

蘇生経験者と狂科学者は顔を合わせるなり、軽口ジャブの応酬を始める。
このようなやり取りも慣れたもんだが、しかし、はて……三年？
まさか、こんな事で俺をからかう必要はミンチには無い筈だし、仮
にこれが本当の事だとすると、少し困った事になりそうだ。

具体的には俺の戦車コレクションとか……三年も連絡無しでガレ
ージに放置されてたら絶対に所有者死亡の扱いとなって回収されて
るんじゃないだろうか。

というか、あの転送事故……時間すらも越えたとかマジですかア
アア！？

「俺の主観としては三年も行方不明になってた覚えなどないんだが
……まあいい。因みに俺の戦車達……その、やつぱり？」

恐る恐るといった感じでミンチの顔を窺う俺に、ハンターの世情
には疎そうなミンチですら耳にしていたのであるう、いかにも沈痛
そうな表情をして、答えてくれた。

「……向こうでは、おぬしはグラトノスや冷血党ナンバーズと相討
ちになって復讐を果たしたという話になつとるよ。まあ死んだ扱い
じゃからな……おぬしのコレクションは“英雄”グラトノスレイヤーの使っていたクル
マという価値もあつたんじゃないだろうか……回収されてオフィス直属の
ハンターに貸与されとるという噂じゃ」

「NOオオオオ……！」

案の定な結末に、俺は頭を抱えて叫んでしまった。
向こうに帰ったら返してもらえるんだろうか。ちくせう……

「まあ、この際、過去の事は忘れよう。……で、ミンチの爺さんよ。まさか太平洋を泳いできたなんて話はなかるうし、どうやってこつちまで？ てゆうか何でまたこんな地の果てに？」

「つーか、それ以前によくもまあ、研究室にあつた品々ごと来れたものである。」

生活用品とか商売道具とか、割れ物注意な脳みそちゃんとか、もう宇宙人の科学かと思えない、地球定常波とやらから電力そのものを共鳴給電するらしい導力受信装置とか。アルトネか？ アルトネなのか！？

特に後者の装置とか、もし普及してたんなら＜大破壊＞以前の世界とか発電所なんて商売あがったりだったんではなかるうか。

それともアレか？ 実用化されたら色々と困る連中が出るんで歴史の闇に葬られたとかいう逸話があつたりするのか？

「つつい利益体もない事を考えながら、爺さんミンチの反応を待っている」と、爺さんは、ふむ……と何ともマッドらしい鋭角に尖ったカイズル髭を指で扱きながら瞑目する。

「＜大破壊＞前の遺物でな。殆ど知られておらんが、ドッグシステムにインストールする事で、指定座標に直接転送可能になるものがあるんじゃないよ。まあ、とある貴重な物質を消費するから気軽には使えんのじゃが……後は衛星^{BSコントロール}端末で、ちょちよいとナビ衛星を勝手に使わせてもらってから人死にが多そうな地域へクルマごと……という訳じゃな！」

「イッヒツヒ！」

なんて、一度聞いたら忘れられそうにない笑顔を洩らしつつ、とんでもない事を言い出してくれるマッド^{Dr.ミンチ}爺さんに思わずハッキングかよ……と呟く。

しかし、良い事を聞いた。その装置なり何なりの情報を聞いて、貴重な物質とやらを集めれば、俺のコレクションを回収する事も可能になるかもしれん……

「あー、ちなみに、その装置？ それかインストールと来るならプログラムか？ コピーするなり貸してもらうなりできるか？」

「太平洋などと言いつくしよるから、もしやとは思ったが……おぬし、地味にインテリなんじゃな。普通に大破壊前の用語が出てくるとは、意外じゃったわ」

「……つまり、今までは馬鹿そうだと思ってた訳か」

「イッヒツヒ！ まあ、そうジジイを苛めなさんな！ して、装置の事じゃが……貸し出すのは無理じゃ。アレはワシの生命線でもあるからの。じゃが、おぬしにとっては幸いじゃったかもしれぬ。アレは元々、この地域にあった軍事施設で運用されておったものじゃからのう」

「……というアシッドキャニオン全域を探すのか？」
「すまなんだが、詳しい場所はもう憶えていなくての……流石に30年近くも過ぎると色々と変わってしまったとるし……む、そういえば確か<ノア>に対する欺瞞工作でドールハウスに偽装されておった筈じゃ。あーなんじゃったかの……そう、【ヘルメス機関】とかいう特務部隊が拠点にしとったわい！ いやあ、懐かしいのお……」

ちよ、この爺さん、ここらに来るの二回目なんか！
それにしても【ヘルメス機関】に偽装ドールハウスね……ふむ、
どうやら俺にも新しい目標の一つが出来たようだな。

「……おぬしが、そこから<BSテレポーター>を持ってきたら、
運用プログラムのほうは、ワシのものからインストールさせてやる
う。ああ、ついでに今回も新鮮な死体を見つけたらワシの所に持つ
てくるんじゃぞ！」

「ちゃっかりしてるよ……」

イッヒツヒと高笑いを上げ続けるミンチに軽く挨拶してから、
テントの幕をくぐる。

予想外の所で良い収穫が得られたと、内心スキップするかのよう
な気分で、レナが待っているであろうガレージへと戻る俺だったが

「……あ。その前に、俺専用のクルマ探す必要があるんじゃないか!？」

先に気付けよ、と自分に呆れることになるのだった。

05話 どくたーみんちに逢いませう（後書き）

- ・どーでもいいが、このミンチ……メタルサーガ仕様である。
- ・ヘルメス機関（湖が広がる） なんちゃら機関の島 ヘルメツ島
- ・コレクション南無！

06話 さあ、狩りにでかけよう！（前書き）

市役所に行って帰ってきたと思ったら、半ドンで保育園から戻ってきていた姪っここに捕獲されました。ふふふ……幼女の無限の体力には勝てない……ふふふふふ（屍

・ボニー&クライド……もとい、レナ&ジン。出撃します！
・さあ！ モンハンだ！

06話 さあ、狩りにでかけよう！

「よう！」

「案外早かったわね」

出来立てホヤホヤ……というより、全損状態から奇跡的な復活を遂げた、といったほうが正しいバギー元ガルスニア号に乗っているレナに声をかける。

そんな俺に対して、どこから入手したか栄養ドリンクKIAI一発を片手に、あら意外と早かったのねとばかりに返し、「乗んなさい」とゼスチャー！。

俺も、特に考える事も遠慮もなくナビゲーターシート助手席に飛び乗ると、レナはエンジンを軽く吹かせてから車を出した。

「で、どこ行つてたの？」

「……ふふふ、それは秘密だ！ と言いたい所だが、何てことはない。ミンチの爺様に挨拶してきただけさ」

「はあ？ ミンチって、テントに住んでて、死体を生き返らせるとか胡散臭いこと言ってる、あの爺さんのことよね。知り合いだったの？」

「胡散臭いのは事実だが……レナ、お前が何に代えても悲願を果たすってんなら、きつと何回かはあのマッドジジイに世話になると思うぞ。事実、爺様がクライニングママに研究所構えてた頃は、俺も世話になった」

うん、変態科学者に身体そのものを魔改造された俺ですら、軽く数回は世話になったんだ。

考えてみれば、よくもまあ研究所まで瀕死のまま辿り着けたり、野営中に砲撃ぶち込まれて臓物引き摺りながら、チート極まる大破壊前の薬物で失血死とショック死を引き伸ばしつつ車載用転送装置ドッグシステム起動できたり、日本文化を勘違いしていると思えない超ヘビー級のサイバネ剣豪にく変身する間もなく、サイバネ秘剣とやらで（防御力もクソもなく！）首チョンパされて「今度こそオワタ」と思っても、運良くイゴールに回収されてたり。

今の実力を手に入れるまで、何回死んだんだろう……つか、これだけ死んでるくせに、我ながらよくS A N 正気値が持つもんだ。

「それにしても……よく脳味噌だけ無事で済んだもんだなあ、俺」
「……とりあえず、爺さんミンチの世話にだけはなりたくないって確信したわ」

ドン引きだった……当たり前だが。

「スナザメ狩るわよッ！」

「へいへい」

エルニニヨ、ハトバ間を結ぶベイブリッジを越える前にと、レナはスナザメ狩りを提案した。

理由は……まあ、定番の金欠解消と経験値の獲得。そして名声である。

因みに、金欠に関しては、俺のiGoogleの「格納領域ふくろ」に入っている幾つかの装備品やネタを売り払うなり、そもそもが一体どの程度の重量があるのか考えたくも無いレベルに達している金片^{Gp}から捻出するなりすれば解消は可能だ。

だが、俺はそれをする気は毛頭無い。そも、これからグラップラーを壊滅させうる力を持ったハンターを目指すというのに、最初から金銭的な楽を覚えさせても良いことなど何一つないからだ。

非常識にも、依頼達成や敵の撃破といった経験値の恩恵で、地道な鍛錬が馬鹿らしくなるほどに身体性能を向上させるような巫山戯^{ふざけ}た世界の住人とはいえ、俺はむしろ地道に積み重ねる小賢しいまでの経験と苦難によって磨き上げるセンスこそを重視する。

最初から高品質の装備で固めて、機械的に積んだ経験値で早々と強さを手に入れてしまつては、弱者が強者に挑むための小細工や、苦境に屈しない精神力を醸成し損なう。

それに、即席で強者となつてしまつたが故に、弱者の持つ狡さにアッサリと膝を屈する破目になったり、己を超える強者に対して馬鹿正直に正面から挑むような脳筋思考に陥り易くなつてしまう。

そついう訳で、俺はレナに装備を貸したり金を与えたりしないの

だ！

決して俺がケチな訳ではないぞ！

砂漠……というよりは、酸性雨とく大破壊により砂礫化してしまつた荒地であろうか。所々に、旧時代の電信柱がまるで墓標のように立ち並んでいる。

日本であつたはずなのに、大破壊後の今では乾燥地に成り果ててしまつたともいうのだろうか。思い出したように疎らに生えているタンブルウィードが寂しそうに風に揺られていた。

「……来たぞ！ クルマに乗つてるとはいえ油断するな！ 下から突き上げられたら愉快的な逆立ちを体験させられるからな！」

「おっけー。副砲ヨロシクねっ！ 私は回避と主砲に集中するから！」

「了解だ！」

言葉と同時に、レナが絶妙な加減速とターンでスナザメから程々の距離をキープする。

近づき過ぎてはダメだ。軽量級のバギーでは、スナザメの体当た

りで大きな損害を受けかねない。

だが、遠すぎてダメだ。距離を離し過ぎればスナザメの分厚い皮の前に、有効打を与えるのが難しくなる。というより、必要以上に距離をとればスナザメはどこかへ去ってしまうだろう。

「オーケー、いい子だ。そらっ！ こいつでも喰らいなッ！」

Cユニットの間接操作ではなく、俺が直接握って副砲のトリガーを引く。

腹に響く重低音。主砲の射線軸に逃げ道を用意してやりながら適度なダメージを与えるように直撃弾は出さない。

Cユニットの制御下でなく俺が直接触れている都合上、この世界の人類の意味不明極まる特性により、機銃本体や銃弾に腕力相当分の謎エネルギーが上乘せされる。

ハンターオフィス基準の脅威度評価アプリケーションにおいて、俺のレベルは119……腕力^{STR}は457。このクラスの数値に俺自身の戦闘LVから導き出される精密射撃が加わってしまうと、上物の大砲並の威力になってしまう。

となると、近辺のトレーダーに恐れられているとはいえ、たかがスナザメ程度……実にアツサリと肉片にしまっただろうから。

「ナイスよジン！ いまッ！」

俺の地味な苦勞を知らない（知られてはならない）レナが、俺の演出した隙を見事に突き、スナザメの鼻面に強烈な一撃をブチ込む^{37mm砲}。

たまらず砂中に逃げ込むスナザメ。ゲームでは潜られようが、出てくるまで気にせず戦えた……だが、現実はその簡単な話ではない。

「あちゃー！ 逃げられたかな？」

「どうかな？ クルマから伝わる振動に気を配ってみる。まだ奴は諦めてないぞ」

そう、まだスナザメは37mm砲を一発もらっただけに過ぎない。人間にしてみれば、強烈なストリートを顔面にもらった程度だ。無論、奴はその程度で獲物を諦めるような性格はしていない。

「スナザメは砂に潜られると極めて面倒な相手だ。潜られたらドリル系の兵器で攻撃するのも有効だが……」

俺は、そう言って戦闘道具袋から、懇意の芸術家^{アーチスト}に用立ててもらった音響手榴弾を取り出す。

「レッスンだ。サメって生き物は実に様々な知覚器官が人間よりも優れている。その中でも特に優れているのが、聴覚……レナ、耳を塞げ！」

ピンを抜いて放り投げ、ファイバーイヤホンを装着。レナが操縦をCユニットに任せ、慌てて耳を塞ぐ。

爆音！

『ギヤアアアアッ』

聴覚から脳を破壊しかねない超音波の爆裂に、弾き出されるかのよう
に砂上へと跳ね上がるスナザメ。

軽く蹴ることでレナに安全を知らせてから言葉を続ける。

「優れたるが故に、このように単純な音波属性ではない音響兵器で砂から叩きだす事も可能って訳だ。ま、これやったら逃げようとするから一氣に仕留める必要があるけどな」

「へー、なるほどね。それじゃ後は……」

「……トドメと行こうかねッ！」

連撃、追撃、乱撃、猛撃！

砂上でもかくスナザメに砲弾と銃弾が、これでもかと撃ち込まれる。

そして、もはや虐めでしか無くなった賞金首狩りは、その後1分も掛からずに終わりを迎えたのだった。

「スナザメ獲ったどーーッ!」

「何ソレ?」

「<大破壊>以前から伝わる決まり文句だ!」

06話 さあ、狩りにでかけよう！（後書き）

実際のサメがスタングレネードとかで水中から飛び出すかと言われれば判らんとしか言いようが無いッ！

まあ、この世界ではモンスターハンターの的な繋がりですナザメは音爆弾に弱い……ってことでw

07話 いいことをきいたぜ！（前書き）

引き続き今日も掃除と再配置。

冷蔵庫とかクソ重くて腰がイワされそうです。

そのせいか文章が地味に荒くて短い、と思います。

・レナ、はじめての……

・なん……だと？

07話 いいことをきいたぜ！

スナザメを、ほぼ無傷で平らげた俺達は、スナザメ討伐の証拠映像をiGoogleで記録すると、ついでとばかりに使えそうな素材が無いかとスナザメを調べる。

いかに非常識ワールドとは言え、倒すと死体が消えてアイテムを残すような現象は残念ながらない。実際には倒した後の死体や残骸から使えそうなものを回収する訳である。

そうになると、当然ながら問題が発生する事もある訳で……

「うーむ、使えそうなものは無いな……このサメキバあたりを使って白兵用の武器ぐらいなら仕立て上げられるかもしれんがマトモな素材は期待できんな」

「ええー、ちよつとやり過ぎたかな？」

「あー、まあ、そうだったかもな」

「……肉とか食べられないかしら？」

「生体装甲になってる表皮近辺と機械部分を除けば食えるんじゃないか？ サメ肉は大破壊前には栄養豊富で低カロリーと言われてたらしいし……ぶっちゃけ、この小便臭さを処理できるだけの調理の腕があるかが問題だと思うね」

「そーかもね。それにしてもこれ……くっさいわねえ」

ぬめぬめ細胞を始め、バイオモンスターの生体部分肉を食って生きているような、遅しき荒野の人々からしても鼻をつまみたくなる臭さ。遺伝子操作でバイオモンスターに変えられた結果、臭いまで強化されてしまったのかと疑いたくなる臭気には流石に辟易とさせら

れる。

「……ヒレの部分だけ小さく切り分けて「格納領域ふくろ」に保存しておこう。フカヒレの作り方ぐらいなら知ってるから、処理して売ればちよつとした金になるだろう」

「うええ、正直アレを入れたら中まで臭くなりそうんだけど……」
「ブチブチ言うなって。一度似たようなことをした事があるが、別に臭いだの混ざるだのいった事はなかったから問題ないさ」

ゲンナリとした表情を浮かべるレナを促して、とつとと切断作業を始める。

とはいえ、今のレナの力では相応の武器を使わないとスナザメの表皮には歯が立たないだろうから、その仕事は俺が担当する。

レナのやる事は、俺がスナザメを解体している間、モンスター邪魔者が近づかないように警戒することだ。

……まあ、結局その後は特に何事も無く、戦利品を回収した俺達はマドのハンターオフィスまで一旦戻る事になったのだが。

「うふふ……2000G。山分けしても1000Gかぁ……」

「喜ぶのは構わんが、無駄遣いするんじゃないぞ？ 1000Gなんて少し何かに使えば消えるような額でしかないんだからな」

初めての賞金首撃破と、ズッシリとした重みに舞い上がっているレナに軽くクギだけは差しておいて、俺はハンターオフィスの担当者と話をつける。

トリップしているような有様のレナが俺の言葉を、どの辺りまで聞いているかは兎も角、今はこっちのほうが大切だ。

「……で、旧北米＜ジャツジメントバレー＞近郊のオフィスに連絡は取れないと？」

「はあ……というより、私どもの利用できる衛星回線網は、日本国内のものだけでして……専門化の話ではノアによるネットワーク破壊の影響ではないかとの事です。まあ、正直な所、似たような質問が＜大破壊＞後に何度もあったそうですが、私どもとしましては残念ですがどうにも……」

言葉遣いだけは慇懃だが、もはや対応がマニュアルと化しているような質問だったのだろう。オフィスの表情は、いかにも面倒そうな様子だ。

考えてみれば、それも当然かもしれないな。＜大破壊＞で日本国内に取り残された外国人だって、当時は可也の数だったろうし、比例して問い合わせも多かった事だろう。

昔はハンターオフィスという形で無かったにしても、元・通信会社や様々な情報機関が合体してできたであろうオフィスの者からしてみれば、俺の質問は「どうして今更」としか思えなくても仕方が無いかもしれない。

「BSネットでも外国との通信ができないのは分かった。だが、国内の通信環境が生きてるなら、国際転送ターミナルの情報ぐらいは手に入るんだろうな？」

「残念ですが、そこまで詳しい情報は……確かに過去、そのような施設があったと聞いたことはありますが、場所が場所だけに大破壊後の無事を確かめたという話は耳にしませんね。転送ネットワークからも隔離されているようですし、それを求めて大破壊後の荒野を彷徨うぐらいでしたら、いつそ転送装置を長距離仕様に改造でもするほうが楽かもしれませんよ？」

まあ、転送装置を改造できるような旧時代の科学に詳しい方が居ればですが。と続けるオフィス員に「役に立たんヤツめエ」と脳裏のベアード様がモワモワさせられたが、無理を言っているほうは俺なので押さえ込む。

やはりミンチの情報に従うほうが一番の近道な気がしてきた。

「……もうその辺りはいい。せめて近場でクルマを入手できそうな情報はないか？」

半分諦め気味に問いかける。

もーどーにでもなあれ！と言わんばかりの俺だったが、オフィス員は軽く考えるかのような様子を見せてから掌をポンと叩いた。

「ああ、そういえば、マドから東の辺りにあるトレーダーキャンプ

の人が金に困ってバイクを手放したいとか言っていたらしいですね」
「なん……だと？」

思わず劇画調の顔になってしまいがら呟く。

オフィス員が知っているようなら、どこかの賞金稼ハンターぎに知られていてもおかしくない。

金で買えるのなら俺としては何の問題も無い。むしろ、素直に金で買えることの方が少ないこの時代では、とんでもない良い話だ。

何気にとんでもない情報を齎したオフィス員に大破壊前の高級酒を無理やり手渡すと、俺は未だにトリップ中のレナを放置したままにマドの町を飛び出した。

07話 いいことをきいたぜ！（後書き）

・黒バイは俺のもんだアアア！

そして短距離ならチーター以上の速度で走るケダモノボーイが降臨
（笑）

08話 なんでもこうなった！（前書き）

ぬう、相変わらず文章量が増えない……ていうか短い（汗

・ジン大暴走

・なんでもこーなった！

08話　なんでこうなった！

「ハッハアー！　そう、これだこれエ！」

風を切る感覚と、腰の辺りから伝わってくるエンジンの駆動。メタルマフラーが奏でる重厚な排気音。この地での新たな相棒となったストレイドッグのハーレーダヴィッドソンにも似た趣おもむきに感動すら覚えつつ、ハイになった気分を隠しもせずに、マドへ向けてフルスロットル。

文明社会で不自由無く生活し、だが、数え切れないほどの法きまりに雁字搦めと縛られていた影響だろうか。悲しむべき事に、見渡す限りの荒野と成り果てたこの世界で、だがッしかし！　何に縛られる事も無く愛車を走らせる事ができるという極めつけの開放感。そして爽快感ッ！

ありとあらゆる意味での強さが無ければ屍と成り果てる、弱肉強食の理に囚われたとしても、この自由の前には、全てが無価値となる。

時折、残された前世の残滓が、この無法で暴力的な観念に弱々しい抵抗感を示す……が、殺し殺され喰らい合う修羅か羅刹の世界を体験した事が、己の純粹さでも奪ったか、もはや中毒的とも言える自由の悦楽の前には無駄というものだった。

ぶっちゃけ、ドライバーズハイってヤツである。

「オラア！　邪魔だ邪魔だアア！」

相棒の咆哮に刺激されたか、それとも人類の臭いに排除欲求でも刺激されたかは不明だが、行く手を遮るように数体のバイオモンスターが姿を見せる。

だが、知るがいい……今の俺と相棒の目の前に立ち塞がることの愚かさを！

自分以外には誰もいない荒野のド真ん中。獲物と俺だけの空間で、たぶん俺の口元は猛獣が威嚇するかのような笑みが浮かんでいただろう。

非武装だが、それゆえに軽い相棒を、踊らせるかのように躍らせる。

ただそれだけで、全ての雑魚どもの攻撃は悉く外れさる。まるで中らない事こそが絶対の運命であったかのように。

そして、より一層の加速を見せる相棒の上で、何時の間にか構えられていたSMGグレネードF2000 タクティカルが鮮烈なマズルフラッシュを見せた。

グレネード装着時、5kg近い重量を持つソレを片手で……それもフルオートの反動を軽々と吸収しながら放たれる死の弾丸が、的確にモンスターの急所に叩き込まれ、一切の例外なく消し飛ばしていく。

たかだか4g程度の鉛弾が、まるで「俺は滑空砲にも負けねーぜ！」と自慢げな表情をしているのが感じられそうな理不尽極まる威力。

そのような巫山戯た攻撃に、この周辺に出現するような雑魚が一瞬たりとも耐え切れる筈も無く、俺がそいつらの横を通り抜ける頃にはキレイさっぱりと荒野の肥料こぼしに成り果てていた。

「ふはははア……今日も地獄は満員だアア」

後で考えると、何でもここまで暴走していたのだろうかと首を傾げんばかりのハイテンションに気付く事も無く……今はただゴール地点を目指して相棒と共に風となる至福に浸り続けていた。

「……で？ 言い訳ぐらいは聞いてあげるわよ？」

「サ、サーセン」

「あ、あん？」

「誠に申し訳ございませんデシタアアア！」

御機嫌極まる新たな相棒を僅かに1000Gで譲ってくれた、ス
トレイディング
キンヘッドの大男に感謝の念すら抱きつつ、意気揚々とナイル爺さ
んのガレージへと乗り入れた俺を待っていたのは、金色の夜叉によ
る制裁だった……

トリップしてしまっていたとは言え、知らぬ間に問答無用の放置
プレイを味合わされた事が、よほど腹に据えかねたらしい。

そんな時に、俺が如何にも御満悦といった様相で戻ってきたものだから、その瞬間にナニカのゲージが振り切れてしまったのだろう。

人外の域に達して久しい俺の剛体が、無拍子かと感嘆せんばかりの見事さで繰り出された、ひょうこつ、パンチラキックレナの必殺の一撃でリアル犬神家させられてしまったのだから本当に恐ろしい。

親しい女性荒ぶる鬼神の赫怒には、男がどれだけ強かるうが、男……という生き物である限り無駄なのだと思います。知らされる有様に、俺は無条件でゴツド土下座を披露せざるをなかったのである。

「いや……な？　クルマ入手の機会を見逃すのはハンターとして問題がある訳でしてね？」

「ウルサイ……少し黙りなさい、ネ？」

ちょっと理由付けをして頑張ってみたが、やはり怒った女レナが言葉だけで機嫌を直すはずも無く、大人しく貢物を献上する事にする。ダメンズウォーカーなM女180。があるまいし、一度ヘソを曲げた女性ためしが男の小賢しい言い訳だけでくると態度を変えた例は無い。

こういう時、男のやれる事は悲しいまでに少なかったりするが、こめんなさいけんじょうぶにつめあわせそれでも謝罪と貢物と意思表示は確りとやっておくことをお勧めする。

……って、おかしいな？　俺はレナと男女的な意味で交際おつきあいしている訳じゃないのに、何でこうなった！　何でこうなった！？

鉄面皮いよいよ混乱の極致に至ろうかという内面に対して、あくまでも真面目な顔を崩そうとしないマイフェイス。

そんな顔でスツと差し出された献上物を怪訝な目で見ているレナに、そつと手渡す。

「……何よこれ？」

「ファイバーイヤホンだ。音波耐性が得られると同時に、コードをiゴーグルに接続すれば登録した周波帯同士でクリアな遠隔通話が可能になる」

「こんなので誤魔化されないわよ！　と言いたい所だけど……ま、今回はこれで許しといてあげるわっ」

意外な程にあつさりと態度を変え、嬉しそうにファイバーイヤホンを装着するレナ。謝罪の品をスナリ受け取ってくれたのはありがたいが……なんで嬉しそうにしてるんだ？

ひよっとして……担当れたか？

いや、だが、あの怒りっぷりは本物だった。

前の世界に横行していた【見せられないよ！】どもなら、確実に過剰なレベルの謝罪御遍路と高級埋め合わせコースがセットで要求されかねない。

まあ、そんなヤツは此方としても願い下げだが……うむ。これは大破壊後の女性がカラリとした性格なのか、レナ個人が後に引き摺らない性格なのか。やはり女性の事は良く分からね……

それにしても、レナに対して資金や装備的な協力はなるべくしない予定だったが、いきなり例外が出てしまったか。

ま、これに関しては何のみち必要になる物でもあつたし、特に過剰な支援という訳でもない……うむ。ここは仕方が無かつたとしておこつ。そう……仕方が無かつたんだッ！

「……あ、でもアンター週間はバイク禁止で私の横に乗ってもらうんだからね!」
「ぎゃほーーーーっ!?!」

08話 なんでもこうなった！（後書き）

- ・ジンは既に調教され始めているようです（え
- ・オアズケ！ ケダモノには相応しい言葉だよね！

<戯言>

我にクリスマスなど存在せぬ……我にあるのは、苦り済ます。
すなわち掃除と力仕事と家族サービスのみ！

安西先生……潤いが欲しいです。

口惜しいのでクリスマス外伝など書かぬッ！ 我は書かぬッ（血涙

09話 あんまりだぁぁ！（前書き）

これもある意味ではキンクリなのか……

- ・ジンさん、エ デイシ化。
- ・絡まれやすい体質。イベント的な意味で。
- ・ハーレム男涙目。

09話 あんまりだぁあ！

バイク禁止令に、文字通りの半身を引き裂かれたかのような悲しみで軽く鬱に浸りつつ、Cユニットのイモビライザー機能をONにし、始動キーを抜く。

共に荒野を駆け抜けるはずであった相棒が、こうしてガレージの地下駐車場に空しく放置されるのを見ていると、俺の気分もどこと無く空虚さを増したような気がしてならない。

「一週間……一週間も相棒おまえを放置しなければならないなんて……酷すぎる、うつう……あんまりだア、こんなにあんまりだアアア！」
「……なに馬鹿やってんのよ！ 恥ずかしいからやめなさいッ！」

あまりの悲しみに、思わずエディシゴっこを始めてしまった俺に、相変わらずの鋭さで、スパアーンと快音爽やかな突っ込みが入る。って、何時の間にかハリセンまで常備化されてやがる！

「いや、あまりの悲劇について」
「人間の相棒よりクルマを優先するような馬鹿には良い薬よ！」

むふんと胸を張りながら言い放つレナに、少しだけバツの悪さが蘇る。

まあ、オフィス経由の確度の高い情報……それもクルマに関するソレに、餌を撒き散らかした湖のブラックバスもかくやという勢いで食いつくのは、

ハンター歴の長い人間に染み付く本能とは言え、仲間を放置してまで行動に走ったのは、あまり褒められたものではない。

たとえ、大破壊後の荒野では当然の行動だったとしてもだ。

「……それに関しては反省してるよ。だから素直に禁止令には従ってる」

少しだけ苦々しさを浮かべつつ肩を竦める俺に、「あんたの律儀そーな所は好きよ」とウインクひとつ。

まだまだ歳若い小娘のくせに、そういうところは様になっていやる。これも育てマリアの親の薰陶が何かによるものかねえ……

「ごちゃごちゃと収まりの悪い赤毛を片手で撫で付けつつ、俺は一週間の付き合いになるであろう定位置ナビシートに腰を下ろした。

「で、こうなる……と」

「……てヘッ」

そんな反省の欠片も無い笑顔デヘベロで誤魔化せるとでも思ってたのかあ、

ああん？ と先日立場が変わったかのような状況で、レナに胡乱な視線を飛ばす。

因みに、周りに散らばっているのは、死体、死体、惨殺体、挽肉、謎肉、遺骸、残骸、鉄屑といった代物で、まあ当然の如くそれらは先程まで動いていたものだったりする。

端的に言っても、凄くヤらかした後です。本当に有難う御座いました！ ってな環境です。

まあ、こうなったのにも理由がある訳で、それは或る日の狩りの序でにエルニニヨの町に立ち寄った事から起こった。

ハンターオフィスにて、自分の手配書を見て大騒ぎしている馬鹿兄弟を生温い目で眺めつつ、指定モンスターハントの賞金を受け取り、エルニニヨのランドマークにもなっているであろう展望ビルの前を通りかかった時のことだ。

何か騒がしいとは思ってたが、ビルの入口から唐突に俺とレナの前に吹っ飛ばされてくる若い男性と元凶と思しき二人のグラップラー。
20代ほどの

そして、俺達の困惑など知った事かとはかりに目の前で繰り広げられるドラマ染みた展開と暴力。

展望台に住んでるらしい、メンドーザ？とかいう有力者に奪われた妻を全財産で返してくれと、男がグラップラーに縋りついては殴られ、蹴り飛ばされ、最後にはお約束の如く「折角だから金は俺達がもらっておいてやろう。けけけ」と進んだあたりで、ついにレナがキれた。

グラップルスーツ はいのう
全身装備に背囊、おまけに機関銃で武装した大の男を、世紀末の

覇者も刮目せんばかりの拳撃で数メートルも空中遊泳させたかと思うと、凄まじい笑顔で「暴力反対！」と嘯くレナ。

普段、どこから見ても太陽のような美少女としか言いようのないレナが、このときばかりは男気に溢れまくったオーラを発散していた。

当然だが、済し崩しにグラップラー二人と戦う破目になったので、俺とレナでボコボコにして追い払った後、如何にも何かを匂わせる発言の割に、事が済むまで物陰に隠れていた筋肉男が接触してきたり、どこかの酒場のバーテンにしか見えない自称レジスタンスのリーダーに勧誘されたりと、世界意志によるイベントか何かかと思えない怒涛の展開に巻き込まれたのだが、それもまあいい。

問題は、自称レジスタンスの勧誘を断って、転送装置の置いてあった地下への入口が覆われているテントから出たあとだ。

騒ぎでも聞きつけていたか、それとも直に見ていたか、薄青い髪の美女が俺とレナを見かけるや否や「お願い！ アクセルを……弟を助けてやって！」と取り乱しながら、先の騒ぎの男の如く縋りついてきたのだ。

見るからに肉感的な美女の縋りつきにも、内心は兎も角、外面だけは紳士的に振舞う俺に、何故か陰の籠った視線を向けつつも、元々からして面倒見が良いのであるう。レナがやんわりと美女を引き剥がしながら事情を聞きだすと、俺にとっては頭痛のしそうな理由が転がり出てきた。

要するに、彼女の弟である、アクセル　つまり原作におけるモヒカンメカニックだな　が、グラップラーのクルマを滅茶苦茶にアレしてしまった結果、牢にぶち込まれた拳句に処刑されるんで、その前に助けてやって下さいという、こうして文字にしてみると何

とも自業自得な結果を覆してくれとか……いや、そもそもグラップラーが悪いんだろうが、モヒカンボーイにも多大な責任があるだろうと。

そんな俺の考えとは裏腹に、グラップラーに恨みを持つからか、面倒見というレベルを通り越して本質がお人好しなのか、それとも実は百合な性癖の持ち主だからかは不明だが、レナはホイホイと牢破りの手段を考える事にしたようだった。

……まあ、一応できる限りの範囲でと付け加えていた辺りに、それなりに周りは見えているんだろうかと思っていたが、どっこい

「ジン。あんたなら、この錠前……どうにかできるんじゃないの？」

キラースパスを放ってきたのだった。

何か原作では牢破りの名人とかを連れてきたような記憶があるが、まさか俺が牢破りする破目になるとは……と、もはや遠い目をしながら悪女から巻き上げた斬車刀ルシーで十三代目石川五エ門ざんてつけんよろしくズンバラリン。

たぶん、俺は怒涛のイベント尽くしに疲れていたのだろう。

普段なら気付いていたであろう問題をすっかりと無視してしまっていたのだから。

つまり……

「おい、こいつらだ。やろつ、俺達グラップラー舐めや……」

「あ……」

「えっ……」

「げっ……」

「「牢破りだアアア……ッ！」」

うん。町中にグラップラーがウロウロしている上に、その拠点前であれだけ騒ぎを起こしといて、放置される訳がないんだ。常識的に考えて。

しかも、実にナイスなタイミングで牢破りの瞬間を目撃される始末……イベントを管理しているであろう存在がいるなら、俺は相当に忌み嫌われているか偏愛されているかのどちらかに違いはない。

そういつた訳で、今更に要救助者 アクセル モヒカンじゃなかった

と、その姉を見捨てる訳にもいかず、わらわらと人類の天敵の如く 黒光りするG 出てくるグラップラー軍団や機甲部隊を相手に寡兵で戦う破目に陥ったわけである。

「……まあ、冷静に考えると俺にも責任の一端があったか」

「こ、これは不慮の事故よね！」

「事故を通り越して喜劇にすら思えるよ……」

「……あ、あはは」

レナの境遇を考えれば、グラップラーの齎す不条理にキレるのも無理は無いとはいえ、正直こんな力オス極まる戦いを引き起こすような事は今後、勘弁してもらいたいものだ。

既にボロボロになっていた所に、さながら戦場跡といったアクセントが加えられてしまったエルニニョの町並みを眺めながら、俺は心底から願うのだった。

因みに、この騒ぎでエルニニョのグラップラー勢力がほぼ壊滅し、機に乗じて立ち上がったヒヌケ団なる地下勢力レジスタンスが隠し通路から逃げ出そうとしていたメンドーザなる人物を討ち取って、エルニニョをグラップラーから解放したと宣言したらしい。

なんともまあ、抜け目のない事だが、俺としてはこの手の問題に関わらずに済んだので無問題だ。

レジスタンスを謳ってグラップラーと対抗しているんだから、後の面倒事は彼らでアレコレやっていただきたい。

もう色々と限界を超えてしまいそうな俺達は、メロディ&アクセル姉弟とヒヌケ団の面々に見送られながらエルニニョを後にするのだった。

今はただ、イリットの笑顔と手料理に癒されたいと思いつつ……

「レナ……マドに戻ったら、とりあえず……啼^なかす」
「……なにそれこわい」

09話 あんまりだぁぁ！（後書き）

もはやメインストーリーが何処へ旅立ったのか判らない。

でも、メタル世界のようなフリーダムワールドではそれが普通に思えてくる罫。

10話 ハトバへむかおう(前書き)

二日酔いで脳が痛い…

10話 ハトバへむかおう

「……一日千秋。と言つには早い再会だったな、相棒」

広さの割に利用者が居ないがゆえか、閑散としたイメージすら与えるナイル爺さんのガレージ地下駐車場。

ぼつねんとただ一台だけそこに佇んでいた相棒に優しく声をかけ、万感の念を抱きつつ一息に跨ると、乱暴とも言える荒々しさで始動キーを挿入。

するりと抵抗ひとつ見せず、むしろ歓迎するかのように奥の奥まで飲み込みつくした鍵穴が、本来の主が帰ってきた事を喜び嬌声^{IC照合音}を上げる。

……何だか、えらく勘違いを誘発させそうな言い回しをしてみたが、要するにロック解除して、セルモーターをまわしただけなんだな。これが。

エルニニヨでの大騒動の後……本当に心底から疲れきって、マドの町に帰りついた俺達は、イリットの心暖まる接待^{手料理}のお陰で氣力を

回復させていた。

軽く落ち着いた事で帰り際の宣言を思い出した俺は、早速ながら多分に揶揄からかいを混ぜつつ、テーブルの左隣で食後の気だるさにタレているレナに声をかける。

「では僭越では御座いますが、ワタクシ……ジン・ザ・ドラムカンが進行を務めさせていただきます」

「……また変な事を」

唐突に、何処かの芸能人アーチストかと思わせる調子で道化る俺に、怪訝さと鬱陶しさを緋い交ぜにした表情を向けてくるレナ。

だが、そんな彼女とは対照的に、イリット姉とカル弟は何が始まるのかと興味津々な顔つきだったりする。

「変とは御挨拶な……さてさてエ、お嬢さんレナ？ エルニニヨでは大変やらかしてくれましたねエ（まあ、俺もやらかしたが……）」
「ギク」

「擬音を口にしても構いませんがア……俺も口にした事は実行するタイプなんですよオ……という訳で、レナさんレナに選択肢を用意してみました！」

じゃじゃん！ と効果音を鳴らさんばかりに、何処からともなくフリップが取り出される。

因みに、内容は適当に決めた。

？ 幼き思ひで再び！ 羞恥の限界に挑戦せよ！ 公開спанキン

グ！

？戦場は松の間！ 理性の限界に挑戦せよ！ 寸止め夜戦訓練！

？理由などない！ 肉体の限界に挑戦せよ！ ムシヨ風ドラム缶

押し！

何だか、どれもこれも一癖ありそうなネタだが、羞恥さえ超えられれば最も楽に終了するのが？番。普通は選ばない……というより、俺の理性的にも選んで欲しくない？番。地味に最大級の時間と無駄な労力を味合わされる？番……なお、？番のドラムカン^①は湿らせた砂を詰めて重量増強の上、5本×8セットという初日から精神崩壊モノの地雷仕様にしたいと思う。

「ちょ……何よこれーっ！」

「なー、兄ちゃん。スパンキング^②ってなに？」

「松の間で夜の戦闘訓練だなんて……ちょっと興味深いです」

案の定大騒ぎに発展したのを、ニヨニヨと邪笑を浮かべながら見守る。

それとカル君……その知識は、君には早過ぎるよ。

ところで、イリットにレナ……何故に？番に目が釘付けになつてますか？ そして何故に顔を赤らめながら猛禽の目を向けますか？ お兄さん、遺伝子レベルでメタモーフ細胞が融合しちゃってるから、デキちゃうような事をやっちゃうのは些か拙いのですが……

正直、バイオテクノロジー系のラボでも見つけて、クソ美形仕込みの生体分析とクローニング^③チェック……可能なら培養遺伝子による交配試験ぐらいまではやっておかないとトラウマになりそうな事態が発生しそうで怖い。

「はい、ここで救済タイムです！ バイク禁止令解除で、今回はお仕置き執行を無かった事にできますヨー？」

「……………仕方ないわね」

「……………何だか残念なようなホッとしたような複雑な気分です」

そして、渋々と……………本当に渋々といった感じで禁止令の解除に同意するレナが、ちょっと怖いのですよ。その長い間と「仕方ない」は一体、ナニに対して向けられたものナノデス力？

どことなく、戦々恐々とぞわぞわさせられながら、俺はナニ力を誤魔化すかのようにスキップしつつ地下駐車場へと去っていったのだった。

「……………不本意だけど、ほんっ……………とおおーッに、不本意だけど今日は二両編成でハトバまで足を伸ばすわ」

「ナニに対して不本意なのが微妙に怖いが……………」

「あんたをバイクに乗せとくと風の向くまま居なくなりそうだからよッ！」

「おおっ、やぶへび……………」

さして長い付き合いでも無いのに、ここまで執着するのはヤンデレならぬキレデレにでも目覚めたか、それとも自らの果たすべき責務に俺という存在が不可欠と認識してしまったからか。

素直に、惚れられているとかだったら男としては嬉しいんだけどなあ……などという思考が出てくるあたり、俺も復讐という重荷から解放されて腑抜けてしまっているのかも知れん。

「……で？ エルニニヨ付近には、まだ賞金首デスペロイドがいるようだが、狩らないで行くって事でいいのか？」

「そーね。正直に言えば狩りたいけど、聞いた話じゃ結構しぶといらしいし……今の装備じゃ余計な被害も大きくなりそうだから、ハトバかアズサあたりまで行って資金稼ぎと装備強化を当面の目的にする」

「ん。自分の戦力を確りと把握しているのは良い事だ。俺としても否やは無いし、行ってみるとするか」

互いに頷き合う。

そして、荒野に響けとばかりに二匹の猛獣クルマは高らかに咆哮エグゾーストを上げた。

「……またか」

「本当に台所の天敵みたいな奴らね……」

新たな冒険の地へ！　な気分で出発してから数十分。ハトバとエルニニヨを分ける急峻な川に掛かるベイブリッジ　という割には横浜のアレと比べても普通としか言いようのない300メートルほどのアーチ橋　に乗り入れると、そこでは最早お馴染みですと言わんばかりの武装集団が検問を張っていた。

連中はエルニニヨが陥ちた事でピリピリとしているのか、日頃は通過させているであろうトレーダー連中すらも足止めしているようだった。もう、ここまで来ると、検問というよりは封鎖である。

「まあ、アイツらが検問張ってるのってどう考えても……」

「俺らを探してるか、エルニニヨに対する牽制だろうな」

まなじり

グリップラー

眦を上げながら連中の様子を見ていたレナが、形の良い唇を人差し指で擦りながら独白する。俺は、それに追従するように答えながら、手元の双眼鏡で戦力配置を分析する。
様子見スコープ

……何というか、分析する必要も無いぐらいの悲しむべき下っ端構成員でしかなかったが。

どのくらいのものかと言えば、現在のレナと無改造バギーだけで軽く蹴散らせる程度としか言いようが無い。

もしも連中が橋を爆破解体するとか、数の暴力で山ほど対戦車擲弾を叩き込むなどといった手段にでるなら兎も角、爆破にしては橋桁や構造部に爆発物らしきモノは存在しないし、装備にしてもお馴染みの軽機関銃に山刀。
RPG

鬼札とも言える大破壊前の産物こと<i>i</i>ゴーグル>や<i>B</i>Sコン
トローラー>を保有しているようなツワモノも無し。

「貧弱貧弱ウウウ……としか言いようが無いな」

「エル二二ヨの時のほうがよっぽどヤバかったわよねえ」

顔を見合わせて苦笑。

会心の一発

流石に急所へと痛撃を貰えば、笑えるほど簡単に死んでしまうとい
う中途半端にリアル染みた実情もあれど、まぐれ当たりでピンポ
イントに痛撃を喰らうようなら、それはもはや運命と諦めるしか
ない。

ただでさえ、謎エネルギーの加護で体力相当分の防護フィールド
が外部衝撃を弱め、更にはレベルに^{HP}応じて追加生命力すら得られる
ようなマールヒーローズも吃驚^{びっくり}な世界の存在だ。^{ナモノ}

今まで単純極まる暴力の論理だけで弱者に対してきたような下っ
端^{ツブラ}構成員が、たかだか数台の装甲車両を用意した程度で、実力差……
というより存在力^{レベル}？の差を埋められようはずもない。

「お前だけで軽く蹴散らせるが……どうする？」

「それじゃ、少しばかりストレス解消をさせてもらおうかしら。主
演は私。連中にはサンドバッグの役でもやってもらおうとするわ」

「あいよー。バックアップ^{援護}はしてやるから、好きに殺りな」

輝く笑顔がとってもお似合い^{怖い}ですよ！

などと馬鹿な事を空気に溶かすかのように呟きつつ、俺は狙撃銃^{SR9T}
を片手に相棒を進ませた。^{スレイドック}

まあ、後はご想像の通りといった光景が展開された。

かるゝく、敵車両をバギーの機銃と大砲で蹴散らしたと思ったら、ゆらりと幽鬼もかくやという様子で降車。

リアルワールドの方々が見れば、ショットガンの限界って何処にあるんだろうと現実逃避に走りそうな火力で人数の振るい落としを果たすと、世紀末霸王でも憑依したか、重圧すら感じる鉄拳と、隠す気ナツシングなハイキックで次々と連中を川に叩き込んでいった。鉄拳制裁で星となった連中は、奇妙な悲鳴を上げながらノーロープバンジーを楽しみ、跳ね上げるように鋼鉄のヒールを叩き込まれた連中は何故か幸せそうに水底へ消えていったのが印象的だった。

俺がやった事は、レナの手がどうしてもまわりそうにない連中が飽和攻撃を仕掛けないように何人かの脳天に風穴を開けて、涼しくしてやったぐらいである。

今日の俺は次元大介だと、本職の兵士ソルジャーが聞けば失笑するであろうネタを脳内で楽しみながら銃を仕舞っていると、あ……という詰まった喘ぎのような声が聞こえてくる。

「テッド、ブロイラー……………ッ！」

口から洩れた奴の名は、まるで火を吐くかのような熱気すら帯び、感情を抑えつけるかのように強く、強く握られた橋の手摺が軋みを上げる。

刺し穿つかのような視線は、光線でも放たんばかりの苛烈さで、それでいて全ての温度を忘れ去ったかのように冷え切っていた。

「……………」

橋の下をバイアス・グラップラーの輸送船が通過してゆく。

輸送船の甲板で仁王立ちした、大人二人分はあろうかという青い
ブロイラー
巨人とレナは、橋で互いの姿が見えなくなるまで視線を交錯させ続けていたのだった……

10話 ハトバへむかおう（後書き）

- ・エロい事したいのにできないジンさん。
- ・シリアスは苦手です…

11話 おかいものをしよう(前書き)

2000字ちょっとか…幕間的なノリの回ですね。

- ・ジンさんは地味に面倒見がよかったです。
- ・レナさんが何故かヒロインに見えてきます。
- ・リア充は不発弾の信管を叩け！

11話 おかいものをしよう

「ああ、懐かしき迷彩服……って1000G！ うそッ、迷彩服ってこんなに高かった！？」

「いや、割と普通の値段設定だと思うが？」

「え？ でも、WANTEDの賞金と大差無い値段よ？」

「そーだな。だが、賞金稼ぎじゃなくとも狩れそうなWANTEDの賞金と比べてもしょうがないぞ。それに1000Gなんて、どこかで金蟻でも狩って砂金でも回収すれば軽く稼げる額だしな」

「……何かハンターの経済感覚って頭がおかしくなりそうだな」

「俺も向こうにいた頃は、1日の狩りで数万G稼げたからなあ……」

ビッグブリッジ……もとい、ベイブリッジの遭遇から数時間。仇と直に目線を戦わせて殺伐とした空気を発散させていたレナを手八丁、口八丁で宥めながらハトバへと入ると、俺は気分転換とばかりにレナを買い物に連れ回す事にした。

相手が男なら、こんな時は酒場にでも連れ込んで酔い潰してやるのだが、レナのような若年の少女を酒場に連れ込んで酔い潰すとか、俺の常識的に在り得ない選択なのでこうなった。

強壮極まりない謎人類とは言え、成長期の歳若い女性に酒場特有ガツンと効くの強い酒を浴びるほど飲ませてストレス解消とかマジでありません。良い酒を嗜む程度ならまだしも、若い頃からアル中とか……ダメ！

絶対！

理由は兎も角、俺のほうから買い物に誘った以上は、今回の買い物費用は俺のポケットマネーから捻出する事にする。

近辺で入手可能なものであれば、多少の金銭的負担を持っても問

題は無いし、俺が買おうが彼女が自腹を切ろうが誤差の範疇でしかないからなのだが……

「ねえ、ジン。似合う？」

ハトバで扱っている迷彩服一式と迷彩ベレー。そして何故か足元だけがウエスタンブーツ。激しくミスマッチなので、店主がイイ笑顔でボツタクリ値札を貼ってあるCVCブーツを無言で手に取り、レナに差し出すと、驚いたような表情を見せてからパツと明るい笑顔になり、いそいそと取替え始めた。

しかし、この少女……というか、この時代とでも言うべきか。衣裳部屋すら無いのに堂々と着替えすぎである。着替えルーム

「アンさんのコレですかい？ いやあ、まるで荒野に咲く向日葵のような娘さんで羨ましい限りでんな！」

どれだけ世情が変わろうとも、こう言った部分は変化しないのか…… 眼福とばかりに生着替えショー（笑） とはいえ、元の服装が服装なので、せいぜい水着ファッションショーといった微妙な健全さだったが、ナニワもんを眺めていた店主のお約束に、まるでヤクザ者の情婦を婉曲に褒める大阪商人みたいなやつだと思いつつ答える。

「……いや、コレというより連れたな。賞金稼ぎ的な意味で」ハンター

今の関係性を見れば、正しく旅仲間。或いは主人公と介添え人と
英雄 偏屈魔法使い
いった関係が近からう。

店主もその辺りを察してもしかた、「ほほう……連れですか……
なるほど」などと、この荒れた世界で良いモノを見せてもらいまし
たといった表情で頻りに頷いていた。

……後に、俺の言葉足らずで妙な通称が広まってしまふ事になる
のだが、当然ながら今の俺がそんな事を知っている筈も無く、正し
く後の祭りを味合わされる事になるのだが、それは別の話である。

「その、ありがと……ひょっとしなくても氣を使わせたよね？」

ハトバの人間装備屋を出て、すっかりお色気戦車兵風味に装いを
改めたレナが、日頃の強気さが抜けた様子で隣に並んできた。

邪魔なのか苦しいのか判らないが、上衣のフアスナーを鳩尾の辺
りまで下ろすというレナの着こなしに防具の意味あなのか……と流
れと全く関係無いことを思いつつも、そっちの方面から思考を離し
て、珍しくもしおらしさを見せる少女に集中する。

「……何の事だか判らんが、レナがそう思うのならそうかもしれないな

いな」

「いーのッ！ 素直にお礼言ってるんだから、あんたも素直に受け取りなさいよね！」

ちよつとばかりトボけて見ると、直ぐに何時もの反応が返ってくるあたり、しおらしいのが素では無い事が判る。

「判った判った。まったく……妙にしおらしくするから、どこの令嬢と入れ替わったのかと思っただぜ」

「っーん！ 似合わなくて悪かったわね！」

「自分で「っーん」とか言うな……でもまあ、今のほうがレナらしくて良いと思うぞ」

しおらしさでグラップラーなんぞと戦えるか！ ガオーン！
てな感じでな。

戯けた調子で、ベイブリッジでの雄姿^{レナ}を再現するかのように振舞うと、レナも顔を真っ赤にしながら拳を振り上げる。

「ちよつと！ そこまでじゃ無かったわよ！ 勝手に私を捏造するな！」

「いや、むしろ抑え気味にしてコレですが何か？ あの時のレナ様は誰よりも雄々しく、そして男らしかった！」

「……レナ様いうな！」

この大悪党ブレード・トゥース様も世紀末霸王レナ様には敵うめ

エ！ と演劇風にオーバーリアクションしながらハトバの中を逃げまわる。

怒ったフリをしながら追いかけてくるレナが、声にならないほどの小ささで再び「ありがと……」と呟いたのを、無駄に高性能な俺の耳が拾ったが、当然のように俺は聞こえなかった事にしただった。

11話 おかいものをしよう（後書き）

短いですが、多少は書けたので予約投稿。

そして年賀状投函任務へ…

それにしても、飽きっぽい私にしては、1〜2日更新が続いているのに驚愕だ（笑）

12話 うわさはこわい…（前書き）

寒いッ！ 洒落にならんッ！

おかげで鼻風邪と熱発がダブルパンチッ！

三賀日抜けて早々にパブロンの出番のようです（・・・）

12話 うわさはこわい…

買い物と寸劇？で心機一転した俺達は、資金と経験を稼ぐためにハトバ近郊でモンスター狩りをしたり、ハンターオフィスに届けられる小規模な依頼をこなしたりしながら日々を過ごしていた。

とはいえ、実際にハトバを拠点としようにも整備された宿泊施設のようなものは無く、寝るにも野営するかクルマで休むか、或いは定期船乗り場の屋内駐車場で寝袋生活するか程度にしかないのだ、日が落ちるたびにマドへ戻り、イリットやカル……時にはナイル爺さんも交えて軽い団欒を楽しませてもらったり、確りした屋根とベッドを使わせてもらったりと流れ者にしては行幸極まりない生活が続けさせてもらっている。

旧時代からの負の遺産である温暖化や酸性雨に加え、＜大破壊＞によって撒き散らされた汚染物質や生物兵器の脅威がある荒野で、水や食事に苦労しながら野営をせずに済むあたり、本当にイリットさん御一家には頭が上がらない。

さて、これはそんな或る日の出来事である。

「アズサまで隊商を護衛して欲しいという依頼が来ていたが？」

「うーん、まあ良いんじゃないの？ そろそろアズサまで行こうと思っていたんだし、ついでのようなものよね」

朝、既に恒例となっているオフィスの依頼チェックで、新規依頼が張り出されていた事をレナに教える。内容は、現在ハトバにいるトレーダーの隊商をアズサまで護衛するという、ありきたりなものだったが、ハトバから足を伸ばせる範囲での狩りでは、既に満足な

成長も望めなくなっていた事もあり、アズサ以北に進出する序でに依頼を引き受ける事に決めたようだった。

「アズサに行くのは構わんが、新しい狩場の選定や装備拡充を考えるんだったら定期船でデルタ・リオに渡るのも良いんじゃないか？少し待てばイスラポルト行きの船も来るだろうし」

「んゝ、それも考えたんだけど……まだここいらの賞金首も残しちやってるし、一度マリアの故郷に顔を出しておきたいから」
「……そうか」

凄腕と評判だったレナの育ての親……主人公を庇ってテッド・ブロイラーに黒コゲにされてしまった女戦士の故郷……それならば、アズサに寄るといふのは至極当然の選択だろう。

納得して一つ頷き、出立の前に相棒の腹も満たすべく、満たんサービスのガソリンスタンドへ。

以前の相棒のように、デイ・レヴの劣化品かと突っ込まんばかりの永久機関を搭載している訳でもなし、かといって車載用サイズのくせにモノポールか太陽炉の亜種なのかと首を傾げざるを得ない超機関を持っている訳でもなし……所詮は、店売りのチョコノフが現在の相棒の心臓である以上、燃料を食わせてやらなければ荒野のド真ん中で餓死しかねないのだから。

ああ、金が飛ぶ……

「いやー、まさかあの有名な“荒野の夫婦ハンター”^{めおと}はんがたに護衛を受けてもらえるとは、ほんに光栄ですわぁ」

「は？」

「へ？」

依頼人である、リコと名乗る妙齡の女性トレーダーの言葉に、思わず間拔けな声を洩らす。

あれから、ハトバの酒場横で三人組の女性トレーダー達と合流したのはいいのだが、依頼を受けたハンターとして名乗った所、この妙な通称が沸いて出た訳だから当然のことだろう。

「……な、なんだ？ その微妙な通称は？」

「そ、そうよ！ だいたい私とジンは、まだそーいう関係じゃ……」

「はあ、存じまへんか？ 近頃、ウチらのようなトレーダーでも結構有名になってん。滅法強くて別嬪はんな女ハンターとグループ

ーに血の華咲かせまくった炎みたいな赤髪の男ハンターが二人旅で世直ししてはるって……あんさんら見てはっても、違和感おまへんかったさかい、ウチもてつきりそないに思ってたんよ」

今更氣にした事も無かったが改めて聞くと、中二病を極めきった通称だ。“エルニニヨの救世主”に“赤い死神”って……特に俺、

凄く死亡フラグ臭のする通称なんです……

いや、それよりも誰だ！ よりにもよって“荒野の夫婦ハンター”なんて異名を吹聴しやがった馬鹿は！？

……そのせいかは知りませんが、何故か背中に突き立つ視線でゾクゾクとさせられてしまっているんですが！

「ほほー、まだ……どすかあ」

「へえ……まだ、いいやはったねえ」

「……………」

「レナはん、意外に奥ゆかしい人どすなあ」

「だーッ！ ちがつ、違うの！ これは、そのお、そう！ 言葉の綾ッ！？」

言葉の綾と言える程の洒落た言い回しなどしていなかったと思うが、メグ、ミサ、リコの女トレーダー三人衆にキヤイキヤイと囲まれている所に「オレ、外道・クウキヨマナイ……コンゴトモヨロシク」と救出に行くのもアレなので、ここは敢えて空気読まないを実行してみようと思う。

「おーい。そろそろ出るから、ガールズトークはその辺で切り上げてくれ！」

「（チツ……）ま、仕方ありまへんなあ……ほな、アズサまで宜しゅう頼みますえ？」

「了解だ。まあ、大船に乗った気分でいてくれ。レナ、先導は任せろ」

「はいはい。じゃ、後方警戒は任せるからお願いね。ジン（た、助

かったわ……」

軽くタッチを交わして、それぞれのポジションへ。

道中で、当たり前のように襲撃をかけてくるモンスターたちを軽く蹴散らしながら、俺達は全くの損害すらくアズサへと到着したのであった。

因みに、俺が“空気読まない行為”だと思っていた行動が、周りからはさり気なく相方を護っているように見られ、夫婦ハンター説勘違いが益々酷くなってしまうたのは完全に誤算だったりする。

……この、何処へぶつければ良いのか判らない感情は、とりあえず此の先の賞金首どもに叩きつける事にしよう。うん、そうしよう。

12話 うわさはこわい…（後書き）

- ・レナとジンが実際にそういう関係になったのを想像して「美女と野獣」を思い出した作者は脳がダメかもしれません。
- ・またもや短くて済まぬ。

13話 アズサにて（前書き）

3000字程度。

3時間程度で書き上げたにしてはまあまあ……かな？

- ・ たまに思い出したかのようにシリアスに走る。
- ・ 既に見切られている……だとッ！

13話 アズサにて

アズサの町は<大破壊>以前の交通機関である、新幹線の路線があった高架橋の上下に分かれて作られた集落だ。大破壊後の世界で知っている者は少なくなっているだろうが、町の名前の大元は言わずと知れた新幹線“あずさ”がモチーフとなっている。

また、この町の住人達はグラップラーが猛威を振るうこの地で人間狩りから逃れるため、若者や子供は高架の上にある新幹線自体を家屋とした上層街で生活し、目立つ下層街では見るからにヨボついたイメージを抱かせる年寄り達が闊歩する事で、若い人間の細胞を求めるというグラップラーの目を誤魔化している。

結果として、連中には姥捨て山の如く爺婆が捨てられ、集団生活をしているかのように思われており、アズサ界限は人間狩りから長きに渡って逃れ続けてきたという歴史がある。

まあ、このようにグラップラーの目が届きにくい環境となったアズサに、様々な場所から訳アリの人間が集まってくるのは必然だったのだろうか……気がつけば、アズサという名の集落はレジスタンスの根拠地としての側面をも孕むようになっていったのである。

「ここに来たのは随分と久しぶりね……」

文明の灯火ともしびが世界を照らしていた頃であれば、このような場所に立ち入る事も無かったであろう、朽ちかけた高架橋のフェンス際。眼下に広がる枯れた山肌と、しぶとく残り続けている緑を眺めながら、強く吹きつける高所特有の風で髪が乱されるのを鬱陶しそうに抑えながらレナが呟く。

「……マリアってさ、私を拾う前は本当に女なのか悩むぐらいに男らしい性格だったんだって。あはは、私知ってるマリアは確かに強かったけど、女らしい所もいっぱいあったよ？ フェイさんにアプローチされて満更でもなかったみたいだし」

もし生きてたら、今頃フェイさんの事を「義父さん」なんて呼んでたり、それに嫌な顔をしながらフェイさんが「お義兄さんで頼むよ」とか言っていたりしてさ。

などと、笑いながら続けるレナの視線の先には、その「もしも」の世界でも映っているのだろうか？ 長老やアズサの戦士達からマリアの話を聞いたことで感傷的になっているのである。彼女の瞳は、何時ものような眩しいばかりの青ではなく、深く暗く重さすら感じさせる紺色にも見えた。

正直に告白すると、俺には彼女の気持ちは完全には理解できない。当たり前のようにだが、同じ復讐に焦がれた身である事を勘案に入れたとしても、やはり同じ感情を理解する事はできないだろう。

過去、確かに俺は、あの男グラトノスに対して煉獄のマグマもかくやと言える恨みを抱いた。

俺に地獄の苦しみを与え、怪物へと変貌させ、何よりも自由意志を奪い自らの都合の良いように利用した。そりゃあ、許せない。意識の自由こそを愛する俺がソレを赦せるはずもない。だが、それがどうした？ 俺が受けて、俺が抱いた『怨念』は所詮、自分だけに帰結する個人レベルのものだ。

しかし、彼女は違う。レナは多感であろう幼少期に両親をグラッブラーに殺され、非情の荒野を流離う事になり、マリアと出会って

からも歳に見合わぬ苦難に遭い、最後には肉親同様となったマリアを目の前で焼き殺されたのだ。

ゲーム的に言うのであれば、主人公の主目的や動因を立てる上で必要だったかもしれないが、現実として考えれば在り得ないレベルのヘイトだ。

少なくとも、俺がレナの立場なら発狂モノの感情を抱かされたであろう事は間違いない。

（それだけの『怨念』を抱いて、未だ普通の人間性も保っているなんて、本当に凄いやつだよ……）

静かにレナの横に立ちながら、彼女の独白に付き合い続ける。

このように、少しずつ鬱積したものを消化し、或いは浄化でもしているからなのだろう……彼女が黄金色の太陽のように見えるのは、そして、何時の日かその太陽の如き灼熱正しきの怒りで悪鬼どもに審判の鉄槌を下すのだろう。

いずれ全てが終わったとき、彼女が沈みゆく夕陽のように燃え尽きてしまわぬように、せめて俺だけでも結末を見届けてやりたい……

「よしッ！ 鬱々しいのやめッ！ サイゴン狩るわよ！」
「……シリアスの続かんやつちなあ」

差し当たって陰鬱な気分が発散も済んだのか、一転して何時ものテンションに戻るレナに、今度は俺のほうที่疲れた気分になる。
こういった切り替えの早さは、なんともまあ流石とも言つべきか……

「ん、サイゴン？ お前、今の実力と装備でサイゴン狩るとか……」
「でも、話に聞いたサースティーとかグラップルタワーまで行こうと思つたら必ず遭遇するらしいし……いつそ被害を受ける前に狩つておけば後々安く済むと思うんだけど？」

まあ確かに。ターン制のRPGじゃあるまいし、サイゴンなどの生体兵器がめくら撃ちに放ってくる弾幕から逃げながら移動するのは無理がある。基本的に賞金首となるようなバイオモンスターは人類ノア印の怪物を見かけると追いかけてくるのだ……それも猛烈な勢いで。

「うむむ……」

腕を組んで悩みながら、バギーの装備を思い出す。

大砲 48mm砲

機銃 ガトリングガン

エンジン チョノフターボ

Cユニット スパシーボ？

乗員 レナ 20LV

「OK。判った！ レナはミンチ体験したいんだなッ！」

「違うわよ！ 何！ 死ぬの？ 私、死亡確定なの！？」

謎は全て解けたとばかりにドヤ顔を決める俺に、レナが激しく反応する。

ですが……うん。どう考えても死にますネ。

まあ、俺なら肉弾戦で倒せる範疇だと思うが、現状のレナとバギーで正面から戦ったなら、まず確実に死ぬと俺のハンターとしての勘が断言しています。

「どーしても狩りたいなら、待ち伏せ用のトラップゾーン拵えるか、地道に経験値を稼ぐか、いつそデルタ・リオ辺りまで行ってマシな装備に更新するかせんと無理だな。うん。無理無理」

「そ、そこまで言う？ てゆーか、正直あんたと一緒なら狩れると

思っただけど……」

本国アメリカのコメディアンを思わせるように、肩を竦めながら御愁傷様ですとばかりに首を横に振る。

そんな俺を微妙な上目遣いで見てくるレナに、過剰な助力を自重せよと訴える理性が撃ち貫かれるが、生憎と多重装甲で護られた無駄に硬い理性トス様は感情及び男の本能連合軍の自重解除要請を「だが断る」と素気無く却下。

むしろ「このレナはワシが育てた」という浪漫を果たせと悪魔の如き誘惑で一瞬のうちに感情を裏切らせると、あっさり男の本能も浪漫同盟の一員となった。

「……頼りにされるのは嬉しいが、期待感で現状把握を曇らせないでくれよ？　まずは、自分が戦って勝てるというヴィジョンが見えてくるか考えてみる」

「私が苦戦してるのを尻目にジンが高笑いしながら生身で蜂の巣にしている光景が見えるわ」

「ちょ、おま！」

何と言っ正確な予測！？

だが、そのまま現実になされても困るので、何とか軌道変更を図る。

「レナの中で俺がどんな化物になっているのかは兎も角……もし、一人で戦うならどうだ？　いけそうか？」

心の汗を隠しつつ問いかけると、今度は難しそうに考え込む。

「……オフィスの戦闘詳報だけじゃ確実に判断できないけど、うーん、ちよつと無理かも？」

眉根を寄せながらも真っ直ぐに俺に向けられた眼差しと共に、レナから返ってきた回答は現状に即したものだだったのでホツと一息。

「それじゃあ、改めてどうするね？」

「……素直に、一旦デルタ・リオにでも向かいましょ」

「よろしい」

無駄に臨死体験をせずに済むようで何よりと、俺はニカリと笑みを浮かべてから軽くレナの肩を叩いたのだった。

13話 アズサにて（後書き）

- ・鬱の持続しない女、レナ。
- ・ジンさん、レナのミンチ初体験を避けさせる。

14話 おめざめのじかんです(前書き)

こついう展開になると微妙に文章量が増える傾向にある作者です。

・そう簡単にデルタ・リオに行けると思うなよ？ b y 作者

14話 おめざめのじかんです

「ハトバから船に乗ってデルタ・リオに着いた」

「あの酔っ払いのヘタクソな歌……そんなに気に入ったの？」

「いや、気に入った訳でも無いが、こう何となく？」

海を渡る潮風……と言っても、湖なので厳密には潮風では無さそうだが、ともあれ汚染されているとはいえ、船上で感じる水の気配と風には心踊らされるものがある。

適当鼻歌の内容の如く、ハトバから定期船に乗った俺とレナは、客室ではなく甲板でのんびりと船旅を楽しんでいた。

「デルタ・リオまでは、あと30分ぐらい掛かるそうよ」

「航路の半分って所か……陸地沿いの移動とはいえ、汽船で1時間とは思ったより広いんだな」

「まー、私も含めて、この辺の人は海って呼んでるぐらいだしね」

俺のコメントに苦笑を浮かべながら答えるレナだったが、次の瞬間に響いてきた艦載機銃の騒音に顔をしかめる。

「……船旅と言っても普通にモンスターが出るのがウザいわね」

「船のほうで勝手に追い払ってくれるだけマシだろう」

銃座の18mmバルカンや電磁放射機銃が、思い出したかのよう
に襲ってくる奇怪なマンボウや、死んでからもサーフィンに執着し
すぎたあまりに、何がどう反転したのか光線銃片手に海賊行為に勤
しむようになった動死体を蹴散らす。
イナズマシュート
ギョライキョ
セイガン
ソビサーファー

輸送船の防衛網をモンスターの攻勢が突破しそうに無いのを横目
で確認し、任せておいても大丈夫そうだという事を確信すると、船
旅の雰囲気が出無しとばかりに憤慨するレナを軽く宥める。

まあ、大破壊後の世界雰囲気が出無しだという意見には納得できる部分も多々あ
るが、こんなご時勢に優雅なクルーズなんて夢のまた夢としか言い
ようが無いのだから仕方あるまいに。

それに、いずれネメシス号を駆るようになったらモンスターの相
手や船舶管理、自動防衛装置の云々も全て自分でやらないといけな
くなるのだから、多少の砲火による騒音などスルーしてもらいたい。

「でもねえ……自分でやってるならいいけど、思いもしない所でバ
リバリやられると、こう心臓に悪いっていうか……ビクッてしない
？」

ビクッと……などと、大仰なリアクションで表現するレナに、何
故だかホンワカとした気分させられる。

そんな俺達の様子など知らぬと奮闘を続ける防衛網の砲声をBG
Mに、定期船はマイペースに水上を行くのであった

んだったら、良かったんだがなあ……

「うん……あそこに小島なんてあったか？」

「……デルタ・リオの孤島群じゃ？」

船長と船員が双眼鏡を手にしながら話す。

それに妙に嫌な予感を感じたのは俺の気のせいだろうか？

隣にいるレナと視線を交わすと、レナのほうも妙な勘でも働いたのであろうか、釣り目がちの^{まなじり}眦をよりきつめの角度に跳ね上げながら、件の島とやらの方向へ視線を向ける。

「なーんかヤな予感が……」

「奇遇だな……俺もだ」

少しずつ大きくなってくる島影。同時に、俺の中で響き渡る警報イヤな予感もジリジリと大きなものになっていく。

ジリジリとジリジリと……その島は航路上に割り込むかのように近づいてくる。

航路上に？ 島が？

「……島が自ら近づいているのか？」

「ま、まさかッ!？」

俺の眩きに反応したのは髭の立派な船長のほうだった。

サツと顔を青ざめさせると、船員に素早く指示を出していく。指示の内容はもはや言わずもがなか「Hard starboard (面舵いっぱい)」に「Full ahead (全速前進)」……急激な操舵に大きく船体を軋ませながら定期船の針路が変わる。

こんな時代でも短く2回の汽笛が鳴り響くのは、この定期船の船乗り達の伝統なのか、それとも海の男としての矜持なのか。

「間に合うか？ くそッ、なんでこんな所にグロウインが……」

眩きながら接近しつつある島を睨み据える船長。グロウインという名称は初めて聞くが、船長の様子からすると賞金首WANTEDか何かだろう。しかし、トータルタートルやU・シャークなら兎も角、グロウイン？ 島が動いて襲ってくるとか、何と言う凶悪ひよ たん島。

「……くっ、ギリギリか？　おい、あんたハンターなんだろ？　済まないが」

船長が俺に何かを頼もうとしたその時、男の野太い悲鳴とレナの悲鳴が背後から上がったのだった。

「うわーッ！？　た、助けてくれえー！」
「ちよ、この変態触手！　離しなさいよッ！？」

近づいてくる島影に注意が向き過ぎていたのが悪かったのか、それとも単純に運というものが無かったのか、どこまでも巨大で長大な触手が船底を潜るかのように伸びて、背後からの奇襲を仕掛けてきた。

その触手は、決して尋常のものではなく、透明感とゼリーのような質感を持ったもので、つまり触手の主はクラゲか何かのバイオモンスターだという事がハッキリと理解できた。

「くそつたれ
Bullshit！」

吐き捨てて、S M Gグレネードを手取るが、ぶんぶか振り回される触手相手に精密狙撃で被害無く救出なんて芸当は極めて困難。

ただでさえ高い火力を持つ武器に、俺の能力まで加わっては救助対象もろともに抹殺してしまいかねない。

ならば、近接武器で根元から触手を切り裂くかと、斬車刀を準備すると生意気にも触手が海上へと引き上げていくではないか！

まずい！ このまま、遠くまで引き上げられてはレナも船員も、この触手の主に美味しく晩御飯にされてしまうのは間違いない。マユラーの惨劇再びだ。

「ちいッ！」

舌打ちと共に、最速で電磁光学兵器イレイザーを取り出す。焦点設定を最小値に絞るとトリガーを引いたままエネルギーパックの消費を度外視して剣のように振るう。

斬、ザンという音すらなく超熱量で焼ききられた触手が力無く水面に落ちていくのを尻目に、船縁に設置されている救援用の浮輪をレナと船員に向けて放り投げると、他の触手を牽制するために狙撃、狙撃、狙撃！

きゃあ、と存外に女らしい悲鳴を上げながら水面に叩きつけられたレナが、その隙に投げ込まれた浮輪にしがみついた。

船員のほうは、流石は水夫とでも言うべきか、見事な泳ぎで輸送船の梯子にたどり着き、そこから船上へと駆け上がるように昇っていくと、上からレナに向かって縄を放り投げる。

「ぷあっ！　じ、地獄に仏エエエ！？」

浮輪に助けられ、縄を手繰りながら船に戻ろうとしたのも束の間、旋回と回頭で速力が低下した瞬間を狙い、新たな触手が船を叩き始め、同時にまたもやレナが水中から現れた触手に吊り上げられる。

よく見ると、それらの触手は島のほうから伸びてきているらしく、これらの触手はグロウインのものだということになる。

このように無数に触手が伸びてくるとなると、ここで触手だけを叩いてもグロウインとやらにとつては然したる被害でも無いということか。

やっかいな奴めと齒噛みしながら、再びレナを拘束する触手を攻撃……しようと思つたら、今度は触手がレナを掴んだままに縮んでゆくではないか！　しかも島のほうへ向かつて！

「な、何よそれーーーーー！」

ゆっくりと、だが、それなりの速度で島へと引き摺られていく触手の動きに理不尽を全力で嘆くかのような悲鳴を上げるレナが遠ざかっていく。

「畜生！　使っしかないかッ！」

コート 格納領域
外套を装備袋に手早く仕舞いこみながら、勢いをつけて跳躍！

人外の臂力による飛び込みで一氣に距離を稼ぐと、身を丸めつつ水

中へ。

船上では無謀極まる俺の行動に、船長が叫びを上げながらも冷徹に生き残る事だけを選んだか、少しでもグロウィンから離れようとしていたが、今は関係無い。

むしろ定期船が逃げ延びれば、後でクルマをサルベージする必要も無くなるというものだ。

暫時、無駄な事を考えながら、俺だけにしか理解できないであろう無形の引き金トリガーを水中で引き絞る。

(……ぐッ、お、おっ、おオオオオオオオオオオッ！)

瞬間、まるで炎で焼き焦がされるかのような苦痛に肉体が悲鳴を上げる。遣伝子と同化した悪魔の因子メタモーフ細胞が唸りをあげて覚醒し、異音を響かせながら俺の身体を強靱に……凶悪なソレ生まれ変わらせぬに作り変えていく。猛火の痛苦で飛びそうになる意識を、自分でも馬鹿げていると思うほどの意志力で保つと、死ぬよりも辛いであろう過剰な痛みに耐え切った褒美だとしても言わんばかりに、悪魔の身体が不自然極まりない生体麻薬を分泌し始め、苦痛が快楽へと反転する。

そして僅かに数瞬、燃え立つかのような赤い鬣を持った牙獅子ブレード・トゥースが久方ぶりの自由に、歓喜の雄叫びを上げた。

14話 おめざめのじかんです（後書き）

- ・ジンさん、思わぬ所で初変身。
- ・レナさん、触手プレイ初体験。

15話 けだものさんとよいおんな（前書き）

暇ができたので調子にのって久々の同日連続更新。
だが、相変わらずの俺得駄文でスマネエですw

- ・ケダモノさん、美少女を触手から解放する（お
- ・ケダモノさん、順調に美少女に籠絡される？

15話 けだものさんとよいおんな

無事に変身を遂げた俺は、数度ほど身体の状況を確認するように動かす。

あらゆる肉體機能に異常が無い事を確認すると、水を蹴り抜くかのような勢いで足を動かし、水中を魚雷の如く突き進む。

ブレード・トウースとなった俺は、完全な生体兵器だ。あのクソ^グ美形が究極の戦闘生命体なるものを目指していた影響か、筋力・強^ト靱さ・敏捷性を始め、それを維持するスタミナすらも尋常の領域には無く、そしてメタモーフ細胞そのものが猛烈なエネルギーを供給するが故に、尋常の生命体が激しい活動を行うのに重要な酸素すらも殆ど必要としないという化物ぶり。

更には、本来ならメタモーフ細胞と人体細胞の間に発生する拒絶反応によるショック死や、激痛による理性の喪失を抑えるために、^{メタモーフ・アクティベーター}自動薬物投与装置が必須とも言える変身者^{ナンバーズ}だが、もはや外付けならぬ、遺伝構造そのものがメタモーフ細胞に適応し、おまけとばかりに拒絶反応による地獄の責め苦にすらある程度の耐性を得てしまうというDMもかくやという領域に達してしまった俺は、怨敵グラトノスと対決する頃には自力で理性を維持したままに＜変身＞を遂げるような怪物になってしまっていた。

そして、そんな怪物のスペックをフルに生かして、俺はグロウイン^{ブレード・トウース}に捕獲されたレナを只管^{ひたすら}に追いかける。

^{グロウイン}逃げ続ける触手、追いつかる俺。気付けば水深が浅くなり始め、浮き島が間近となった辺りで、ついに触手へと追いついた俺は、爆発させるかのように足元を蹴りつけると、トビウオかと思わせる黒い影となって水上へ。

慣性のままに、触手へと近づくと五体を上手く捻って、空中で軌道変更を行うという清々しいまでに物理常識をブチ壊す動きで更な

る加速。

すれ違いざまに主力戦車の正面装甲すら切り裂く剛爪で触手を両断すると、グロウインに散々引き摺られてグツタリとしたレナを両腕かいなに抱く。

しおしおと力を失った触手をぐしゃりと踏み潰し、他の触手がいないかを確認しつつ、立ち泳ぎで砂浜へと近づいていくと、いつしか奴の触手はどこにもいなくなっていた……

「……ジン、なの？」

ブレッド・トウス
猛獣の化物に抱かれるレナが力無く呟く。

その青い目は、どこか焦点をずらしてしまっているかのように定まらないが、それでも明らかに怪物と判るシルエットの存在を前に特に脅える事も無く“俺”だと確信してくれている事が何故だか嬉しい。

レナの問いかけに首肯で返すと、メタモーフ細胞の励起を徐々に抑えていく。

今まで、溢れんばかりに満ち満ちていた力が何処かへと消え去っていき、過剰な力を発揮させた代償とばかりに人間へと戻った肉体が疲労を訴え始めたのを無視しながらレナを砂浜へと降ろし、俺もその隣に座り込む。

「……怖くないのか？」

こんな問いが口から出るあたり、本当に怖がっているのが俺自身であるという事がまる判りなのが、自分でも情けないのだが如何ともしがたい。

だが、俺はこれを聞かない事には何もできない。

ジャッジメントバレー

以前の地でも、俺の＜変身＞には色々と悶着があった。そりゃあそうだろう……獣化した俺は、向こうではテッド・ブローラー級の賞金首として恐れられていたし、そうでなくとも人間が獣の化物に変化するという光景を見て恐怖しない者がどれだけいるか。

いっそファンタジーな世界で、人間以外の種族がいるなら良かっただろう。一番最初の俺がいた時代の日本人なら、逆にスゲースゲーと能天気^{オタツキ}に持て囃されたかもしれない。

しかし、ファンタジーではなく人間単一支配の地球……しかも大破壊後の世界で、俺のような存在がいるとすれば、それは確実にバイオモンスターの括りに見られてもおかしくない。

事実として、冷血党^{クラン}のナンバーズという改造人間の事例がある地域ですら＜変身＞を知られた時の反応には少なからず恐怖というスパイスと係わり合いになりたくないという倦厭^{けんえん}が少なからず混じっていた。

とある事情から、プエルト・モリの酒場で＜変身＞してしまった時など、冷血党^{クラン}の人間のみならず、酒場の誰しもが悲鳴をあげながら脱兎の如く逃げ去ってしまったほどだ。

それでも俺がジャッジメントバレーで普通に行動できていたのは、元凶への復讐のためにハンターとして多大な成果を挙げたからであり、他者の目が向く所での＜変身＞を出来る限り避けてきたからだろう。

次々とクラン・ナンバーズを屠り続け、冷血党^{クラン}の天敵としての異名が広まってきたからは、オフィス関連の人間やトレーダーなどの行商人^{同業者}、流れ者などに受け入れられていたものの、そうでなければ何れは異端者として排斥されていたか、悪ければ再び賞金首として追われる羽目になっていたかもしれない。

そういつた意味では、ジャガンナートからの転送事故で俺がジャッジメントバレーから姿を消したという事実は、向こうの住人達にとって「嵐は過ぎ去ったのだ」と実感させる明るいニュースだったに違いない。

それなりに名を上げたハンターが3年間も足取りすら掴めぬ音信不通となったのだ。当然ながらオフィスによって死亡認定されるし、確実に俺がこの世にいないものと踏んだからこそ、荒神を祭るかの如くに英雄扱いしたのだろう。

ぶっちゃければ「死んだ英雄だけが良い英雄」というやつだ。

こう考えれば、オフィスの連中は悪魔の組織と厄介者が見事に潰しあってくれて蝶 サイコーな気分だったんだろうな。

むう……何となく釈然としないというか腹が立つが、何れ向こうに渡れるようになったら、せめて戦車コレクションだけは回収させてもらおう。素直に返してくれるんだしたら、俺も死んだものとしてジャッジメントバレーに近づかないとオフィスで契約してもいいぐらいだ。

それはさておき
閑話休題

レナの返答を待つ間に、つい長々と向こうの記憶に浸ってしまっただが、彼女が静かに口を開いたので意識をこちらに戻す。

「怖くない、か……まあ驚きはあったけど、怖さは無かったわね。何ていうか……目というか気配というか、説明しにくいけど直ぐにジンだって判ったし」

「いや、俺としてはああいった姿に変わるような人間に忌避感はないのかと聞きたかったんだが……」

「ん、私は別に気にならないかな。それにグラップラーの怪人とか比べれば、格好良いぐらいじゃない？ ま、まあ、あんたの事を知らなければ恐怖感とか嫌悪感とか少しはあったかもしれないけど」

二へへ、と面映^{おもはゆ}そうにするレナに、想定外の回答をする奴だという理性と「あんたの事を知らなければ」という逆説的に言えば、俺を知っているからこそだという台詞に熱いものを込み上げさせる感情が妙な化学反応でも起こしたか、可笑しさすら感じてきて自然と笑みが洩れる。

「ははは、いや、まさかそう来るとは……」

いや本当に、そう来るとは……としか言いようが無い。

短い付き合いだが、レナは面と向かって嘘を吐けないタイプだ。こういつちゃ何だが、真顔で嘘や冗句を垂れ流す事のできる俺や、ブラックキューモアに人生を賭けるイギリス紳士のような腹黒とは違う。

その彼女が、真正面から受け入れてくれるどころか、むしろ「格好良いぐらい」だと？ ははは。向こうでは恐怖の代名詞たるブレード・トゥースも形無しだ。

ククツと抑えるかのように笑いの衝動と戦っていると、グロウインによる強制ジェットスキーに疲れも限界に達したか、レナが肩の辺りにコテンと重みを預けてくる。

そんな彼女を支えながら、俺もく変身>による疲労を癒すために暫しの休息を取ることにする。

どうも此方に来てから一人では無くなったせいか、妙な部分で油断の多くなつた精神を引き締めなおしつつ、孤独に荒野で夜を過ごした時のように超感覚による警戒領域を四方に広げる。

フレッド・トウイスの
感知結界

周辺の危険反応や敵意を放つ存在が近くに居ないことを一通り確認すると、静かに寝息を立てるレナを起こさないように心掛けつつ、ゆっくりと瞼を落とした。

15話 けだものさんとよいおんな（後書き）

そして、二人はグロウィン島で慎ましくも幸せな一生を送ったという……

未

完（打ち切りEND）

……嘘です（笑）

それにしても不思議だ……恋愛展開っぽい予定は無かったのに。いやまで、この程度、まだフラグじゃないよね？ よね？

1 / 9 前半部、変身中に理性を保っている理由が抜けていたの
で追記。

16話 みどりのらくえん？（前書き）

よし、今日から通常更新再開。

だが、時間をあいた所為か、微妙に書きにくい感覚が……

・もうお前ら結婚しちゃえよ！

・グロ島探索開始！

16話 みどりのらくえん？

ふと、頬に落ちる冷たい感触に意識が浮上する。

グロウインというより大きな脅威に生存本能でも刺激されるのか、砂浜近辺にはモンスターが近づいて来ないため、寝入ってしまったレナの枕代わりになりながら椰子っぱい樹に寄りかかって身体を休めていたのだが、それなりの時間が経過していたらしい。

天を見上げれば、何故か島だけを覆うように垂れ込める暗色の雨雲。異常気象と酸性雨により自然が激減している人類文化圏にしては異常なまでに緑に満ちた島だとは思っていたが、これも原因の一つか。

静かに降りしきる細かな雨を直に素肌を受けているにも関わらず、冷たさを感じても酸性雨特有の微弱な刺激を全く感じられない。つまり、いま降っている雨は酸性雨ではなく、ごく普通……普通？の雨という事になるのだ。

「……………んにゅう」

降りしきる雨で気温が下がってきたせいか、寒さを覚えたのである。眠り姫^{レナ}が寝言にしては奇妙な音の羅列を洩らしながら、無意識に暖かさを求めて擦り寄ってくる。

伝わってくる体温と押し付けられる双子山の圧迫感に「寝入っているが故の無防備さで、そんなに密着されるとオオ!?」などと若さの根源が騒ぎ立てるも、表層の鉄面皮ハートは心拍数の割りに落ち着き払った態度で、ちゃっかりと柔らかさを堪能しながらこんな事を呟いていた。

（ノウマク・サマンダバザラダン・センダマカロシャダ・ソワタヤ
ウン・タラタ・カン・マン）

……ダメである。全然落ち着いてなどいなかった。真つ当な信仰心など、この世界に生れ落ちた時から投げ捨てているくせに、御不動様に縋ろうとは実にフテエやつだ。

無駄に高性能となつた頭脳の奥底で、どーでもいーことに分割思考を空回りさせながら、第三の思考たる俺は若さが暴走しない事を意識しつつ只管に現実逃避へと走るのだった。

「あれ……ここ、どこ？」
「ふう。おそようだな」

あの混沌のひと時から更に寸刻ばかりが経過し、レナが目を覚ます。軽く目を擦りながら、前後の記憶が不確かなのか頻りに首を傾げていたが、まさに至近距離からの挨拶に「ひゃわあ！」と驚きの叫びを上げて顔を赤らめた。

まあ、自分がどんな体勢で眠りこけていたのかを唐突に知らされたようなものだから、年頃の乙女としては致し方あるまい。

「どっ、どどどっ!？」

「クルマのエンジンか、お前は。それともドラムカンでも押したいのか？」

どちらかと言えば「どうしてこうなってる!？」とでも言いたいのだろうが、俺としても手出し不能じふにふれいの役得と同時に禁欲という名の苦行を味合わされたので、軽く擲擲イジっておく。

そんな俺のデビルスマイルニミエ顔に逆に落ち着かされでもしたか、レナは数度ほど深呼吸をしてから澄まし顔を向けてきたのだが、未だに俺の左腕を胸に抱えている辺り、混乱が持続しているんだろうなあ。

「よし、ちよつと落ち着いたわ。それで、今はどんな状況なの？
グロウインは？」

相変わらず胸元に腕を挟みながら言っても愉快なだけなのだが、彼女が自分の行動に何時気がつくのかが楽しみでたまらないため、スルーしつつ答える。

「触手のほうは島に入ってからは見かけない。現在地は上陸地点の砂浜。お前が眠ってから2〜3時間は経過してる。現在の天候は雨だが、酸性雨ではないため身体や毛髪への影響は無い……といった所か」

「……定期船は？」

「逃げ切ったと思うぞ。触手が島へ向かって引き上げ始めていた時には反転完了していたようだからな」

「参ったわね……グロウインの住み着いている島に、置き去りになっちゃった訳か」

熊ティベアの縫い包みを抱き締めるように俺の左腕に力を込めながら、難しそくに顔を顰しかめる。

俺が見た限りでは、グロウインが住み着いている島というより、島そのものがグロウインという感じだったが、それは後で教えてやるうと思う。

幸い人喰い島といったホラーな産物トラップがあちらこちらにあるといった訳でも無さそうなので無駄に恐怖感を与える必要もないのだから。

「……とりあえず、島を探索したほうがいいわね。今の所、島から出られそうにも無いし、寝床と食料を確保しないと」

真剣味を帯びた表情で俺に確認を取ってくるが、そろそろ俺の腕を解放してくれないだろうか。

自覚してないのか確信犯なのか、相変わらずに食料どころか左腕を確保し続けているレナに、こりゃあ重症だなと頭を悩ませながら天を仰いで溜息を吐いた。

「き、気付いてたんなら言つてよね！」

(……まさか本当に気付いてなかったとは)

探索の最中にまでこれでは色々とし障ると、ついに突っ込みを入れた俺が人生二度目の犬神家事件を体験させられたのは理不尽だと思う。

サア……という静寂が引き立つかのような雨の中、椰子やしと広葉樹ヒノキやクスノキに加え、人間ほどのサイズを持つ珍奇な巨大花が生い茂る「生息域って何だろう」と遠い目をせざるを得ない林道を警戒しながら移動する。

この地域本来のものである雑多な木々に加え、明らかに亜熱帯産の植生まで分布している辺り、やはりこの島は普通じゃないと思わされるが、大破壊後の枯れて乾ききった大地と比べれば楽園のようなものだろう。

これだけ育った樹林に食用にもなりそうな植物。時折木々の藪に隠れるように生っている鮮やかな果実は木苺に属する亜種だろうか？ 毒があるのが問題だが、これらも食べられるのなら食生活という面に限れば、寧ろ荒野に隠れ住むよりも充実した食生活を送れそうなほどだ。

「凄い……こんな森、初めて見たかも」

「賞金首が居なけりゃ、永住しても良い位の好環境だな……っと！」

バン
BLAM!

緑の植生に紛れ込むようにして隠れている歩く殺人薔薇を撃ちぬく。不意打ちを見抜かれたのが癢に障ったのか、周辺に潜んでいたDNAプロフドリルローズ緑色の単眼粘液や獲物を探して自ら歩き回る食人植物がぞろぞろと姿を現すが、今更に奇襲を許すはずもない。フラワージョーズ

「レナ！」
「任せて！」

名前を呼ぶだけの指示に、レナが探索前に渡された冷凍光線銃を
フリザードガン
広域設定で放つ。

光線に晒されたモンスターは、一瞬で熱量を奪われる事により周囲の水分が凍りつき、同時に体内を流れる液体すらも氷へと変わる事で次々と生体組織を崩壊させていく。

事前の感知結果からバイオ系……特に植物系統のモンスターが出現する事を察知していたので、本来ならば火炎放射器あたりを扱わせる予定であったが、火達磨モヒカンテッド・ブローラーのせいで火炎属性の武器に対して軽いトラウマを持ってしまっているレナに、それを要求するのは問題がありそうだったので、次善として冷氣属性の武装を貸したのだが正解だったようだ。

この島に生息するバイオモンスターは、一部を除き25〜30レベルほどの脅威度を持っている。

自らよりも格上の敵を相手に、得意どころか心傷持ちの装備で戦わせるとか、どう考えても死亡フラグでしかないし、店も何も無いであろうモンスター島を探索するにあたり、力不足の装備のままに歩かせるのも自殺行為でしかないために、俺はポリシーを曲げてレナに追加装備を与えたのだが、今の所それが上手く嵌っているようで何よりである。

「おおっと、お残しはダメですよ……っ！」

広域放射のために威力が低下していたか、凍結した外皮を崩壊させながらもフラワージョーズが動いているのを見るや、徐にバンダナの下から取り出した40mmグレネードをコンマ以下の速度でM203に装填。

狙いをつける必要すらなくトリガーを引き絞れば、パンツという空気の抜けるような音と共に榴弾が射出され、生き残ったフラワージョーズを木っ端微塵に四散させる。

「ナイススキル！ これで最後かしら？」

「今の所はそうだな。やれやれ……判ってはいたが、樂園のように見えても結局はモンスターハウスか」

降り続ける雨に硝煙の匂いが洗い流されていく中で、俺の言葉も雨音に溶け込むかのように流されていく。

どうやら島の探索も波乱尽くしのものであった……

16話 みどりのらくえん？（後書き）

今後も俺得展開でテキトーに頑張りますw

17話 みちとのそうぐう。そしてどうくつへ…（前書き）

12日内の更新にちと遅れた。無念だが、時間が限られているので仕方がない。

それにしても展開が遅くなってきたなあ。

17話 みちとのそうぐう。そしてどうくつへ…

森を探索し始めてから四半刻程度。^{30分}未だ雨足は弱まる気配を見せず、薄白く煙る視界のままに俺とレナは林道を歩いていた。

スコールのような叩きつける雨でなく、少し目の粗い霧吹きから撒かれるような雨であるため、直接的に探索に支障をきたすような状況ではないが、充満した湿気による不快感は例えようのないものがある。

外套のフード部分が狙ったかのように焼失している俺とレナは、森に入る前からVCヘルメットとiゴーグルで髪の毛が濡れて重さを増したり、雨粒が目に入ったりしないようにしているが、この環境のせいか目の前が曇る曇る……

「ウザい。iゴーグルだけでも外そうかしら……」

「そうだな……フッ素コーティング剤でも用意してればよかったんだが」

返す返すも大破壊前の科学技術が浸透しきっていた時代が懐かしく、そして羨ましい。

無論、探せばどこかにこの手のものも埋もれているんだろうが、どちらにしろ今現在使用できないのならば意味はなく、愚痴以外の何者でもないのだが。

「ん……あれは洞穴か？」

互いに不快な気分を苦笑として洩らしながら歩いていると、林道の外れに地下へと緩やかに傾斜している洞窟の入口が見えてくる。

一応、この道の前にも分岐路はあったが、さて……どうするか？

「ハンディ・サーチライトがあつたな。先に調べてみるか？」

「そーね。雨避けのついでに調べたほうがいいかも。それに、もしかしたら屋根付きの拠点にできるかもしれないし」

「宿代わりについて訳か。だがその前に…… 他にも無粋なお客さんのようだぞ」

何故か害意や殺意は無いが、じつとりと睨めつける透明な視線の数々に警戒しつつ銃を構える。この手の感覚といえ、ビデオバツトや監視モニター系のそれに近いが、それらの偵察体と比べると妙に生々しい気配だ。

「……やるの？」

「判らん…… 向こうから手出しするような気配は無いんだが……」

奇妙な感覚の発信源を探すため、天を覆う黒雲と生い茂った木々により日中にも関わらず薄暗い様相を見せるグロウイン島の森林に視線を走らせる。すると、程無く何処からか蝙蝠が羽ばたくかのような羽音が近づいてきた。

「えええ、何あれ？」

珍妙なものを見たとはかりに何と感想を言えばいいのやらといった表情を浮かべるレナ。だが、その気持ちも納得できよう近づいてきた存在は、実に奇形染みた姿をしていた。

オタマジャクシと奇形魚と蝙蝠を足して2で割ったかのような外見に、腹部から顔？にあたる部分までは真っ白で、本体から生えている翼や鶏冠の部分は目に痛いほどの青。何より、そいつには生物として必要な部分であろう器官が根本的に欠如しているように見えたが、それを補うかのように巨大な一つ目だけがギョロギョロと動いて俺達をジッと見つめていた。

「……偵察？ いや、観察しているのか？」

バサバサと周囲を飛び回りながらも、何もしてくる様子の無いそいつらと暫らく睨めっこのように対峙していると、飽きたのか害が無いと判断したのか、奇妙な監視者は一斉に何処かへと飛び去っていった。

「何だっ たんだ？」

「さあ。害が無いなら今の所は考えなくてもいいんじゃない？」

互いに狐に抓まれたかのような顔を見合わせ、同時に溜息を吐く。気を取り直すかのように武器を収めながら、俺とレナは目の前の洞穴を調査する事にした。

「なんだこりゃ」

「明るい……」

洞穴の中に踏み込んで異口同音に同じ事を言ってしまったのも仕方無いことだろう。暗くジメジメとしているであろう天然洞に入ったと思ったがどっこい。洞穴の天井に光ファイバーが発光プレートでも埋め込んであるのか、煌々と人工の明かりに照らされた内部が見えてきたのだから、俺達の気持ちも理解してもらえと思う。

「天然洞窟かと思ったら、こりゃかなり人の手が入っているな……もしや大破壊前の遺物か何かグロウインにでもなったのか……」
「それよりも……感じる？ 拠点に使うにも、ここも巣窟のようね。しかも外の奴らより強いのがウロウロしてるわ」

「参ったね。まさか、どこかにモンスターの繁殖地なり供給装置なりでもあるのかねえ……ま、どちらにしろ邪魔者は片付けるしかない訳だが」

言うや否や、物陰から姿を見せる巨象の如きサイズの砲龜……ス

ローウオーカーが2匹に、1匹1匹が30cmほどの大きさをもつ
メタルイータードアンサラチナアント
た鉄蟻、金蟻、宝飾蟻の群れ……おまけに、ここに来てからお馴染
みの面子となったDNAブロボが数匹に、口の変わりにレーザー
イフルを装着した全長数メートルはありそうなサイバネ蚯蚓^{レーザーミナス}まで居
やがる。

ミミズやブロボは兎も角、何と言う経験値と金の塊どもか。これ
は狩るしかあるまい。

「やれやれ。この様子じゃ安心して洞窟生活なんて無理そうだな」

レナにとってはキツイ戦闘だろうが、こいつらを片付ければ実戦
経験としても経験値^{EXP}としても中々のものが得られるだろう。

俺はレナに攻撃が集中しないように軽く敵を牽制しながら、まず
は砲撃と逃げ足が厄介なローウオーカーから狩ることにした。

こいつは確かに反応速度は鈍い。だが、生半可な大砲やミサイル
などでは凹みすらない甲羅と、柔軟性と韌性に優れた皮膚は中途
半端なハンターの攻撃など物ともしない。

そのくせ、ローウオーカーの名を否定するかのよう^{逃げ足}に直線移動
の速い厄介者だ。モンスターにしては臆病な性格をしているのか、
敵と見るや口の中に仕込まれた極めて貫徹力の高い大砲をブツ放す
と、一目散に逃走し、逃げ切れぬと見るや、甲羅に籠りながらガ
ラかと思うスピターンで空どこるか地中深くへと逃げ去っていく。
こいつばかりは小細工や罠が通用しない。倒すには、奴が危険を
感じるよりも早く、奴の装甲を貫くような砲撃を叩き込むか

「……………落ちな！」

奴の死角から、比較的に弱い首を断つか、高い破壊力を持った銃器で脳天を撃ち砕くかだ。

すり抜けざまに、戦車すらも断つ斬車刀を一閃。

鈍い脳味噌が自らの首を落とされた事すら気付かぬうちに、先程の言葉を実践するかのように、もう一匹の脳天にワンハンドガリルを向けて撃^{トリガー}発。

極めて高い必殺率を誇るガリルの弾丸に＜力＞が注ぎ込まれたことで、奴に比べれば蚊のような質量しか持たないはずの鉛弾は見事に強靱な頭蓋ごと奴の脳味噌をこの世の果てまでオサラバさせた。

「二匹撃破」

サメのように獰猛に笑いながら次の獲物を探すその刹那……俺の背後では既に二回の冷氣放射により、DNAプロブとレーザーミミズの入り混じった群れをレナが汚れた力キ氷へと転職させているのを察知し、次なる獲物を蟻の群れと定める。

殺傷力は低いながらも、その顎と蟻酸は中々に侮れない連中だ。酸は対策を忘れれば大変な事になってしまふし、頑丈というレベルを超えている顎牙は戦車の装甲だろうが人間の肉だろうが均等に咀嚼し、噛み砕いてしまふ。

こいつらが無数に襲ってくるような事態になれば、正直普通のモンスターよりもよっぽど恐ろしいと思うが、今の数は数匹に満たない。

「ならば、一掃するのみ！」

グロウィン島に遭難という事態に陥り、自重という自重を捨て去った俺は、こうして次々とモンスターを狩り倒していくのだった。

因みに「どっちがモンスターだか判りやしない……」というレナの煤けた呟きに少しだけケダモノハートが傷ついたのは秘密だ。

17話 みちとのそうぐう。そしてどうくつへ…（後書き）

- ・牙獅子も広義で含めればモンスターだよなw
- ・レナさん、順調にレベルアップ中。

18話 くものいと……なのか？（前書き）

うーむむむ、妙に鬱い気分でテンションが上がらん。

かけた時間の割りに2000字程度しか進んでないとか氣力が尽きるう……

18話 くものいと……なのか？

洞窟の調査をし始めてから小一時間ほどが経過した。

あれからも散発的に襲撃をかけてくるモンスターの群れを撃退、殲滅しつつ洞窟の地上部を歩き尽くした俺達は、最奥に微妙に色合いが異なる偽装床を発見。偽装を排除して地下へと続くスロープをくだり、更に調査範囲を広げている。

「はぁ……. どんだけ巣くってんのよ」

「台所の天敵並みの繁殖力……. と言いたいが、こいつは何処かにモンスター用の抜け道でもありそうだなあ」

うんざりとした気分で、行く手を遮るモンスターヘイマガジン分の掃射を加えると、iゴーグルのショートカット機能で給弾用格納領域と連結したバンダナ下から新しい弾倉を取り出して素早くリロード。

俺のバンダナが、こんな面倒な手順を踏まなくても済むような、蛇さん愛用の無限バンダナだったら良かったのにと益体もつかない事を考えながら、再びの掃射で残敵を一掃する。

レナも俺に負けず劣らずのペースで、天井や水溜りから這い出てくる粘体モンスターやムカデの化物を氷漬けにしているが、やはりその表情は陰鬱そのものといった感じで曇っているようだ。

連戦に続く連戦といった探索行だが、人が余り立ち寄らない場所のモンスター遭遇頻度など、正にこのようなものだったりする。

<ノア>は余程に人類という存在が憎かったのだろうか……. 地球

環境の回復という至上命題があるにも拘らず、繁殖力の高い凶悪なバイオモンスターを地上で放し飼いにし、今も何処かのプラントで生産され続けている殺人機械は破壊しても破壊してもキリが無いほどだ。

<大破壊>直後の人類軍との戦争では、散々に核兵器や氣象兵器…… だけならまだしも、衛星軌道あたりでは宇宙兵器すら飛び交ったというから、本当にどこのSFかと。

まあ、そんな兵器が世界の彼方此方でボカスカやつちまったものだから大破壊後の世界がここまで荒廃しているのも致し方ないことなのだろうが…… あのポンコツ電脳は人類が滅びた後に、一体どのぐらいの年月をかけて地球環境を再生させる心算だったのだろうか。

「あ、また亀が……」

「ほいほい。んじゃ、さっさと首狩ってくるから、後ろは宜しくな」

この島を出る頃には、レナが何処まで強くなっているのやらと思いつつ、俺は巨獣狩りに勤しむことにした。

「これって……転送装置ッ!?」

「間違いないな。生憎と電池切れのようだが……」

何でこんな所にと首を傾げながら制御端末のパネルを調べる。

さて、地階に潜むモンスターを狩り倒しながら進むこと暫し……分岐路をダンジョン探索における右手の法則とばかりに右折して進んでいく事で見つけたこの場所。

地上部の植生といい、天然窟に見えていながら明らかに人の手が入ったこといい、やはりこの島は元々は何らかの施設だった可能性が上がってきたようだ。

か細いとは言え、脱出の目蜘蛛の糸が出てきた事に軽く口元を歪ませながら幾つかの操作を試すが、長年の放置でついに餓死してしまったのであろう端末は、やはりウンともスンとも言わない。

装置本体の共鳴電送部が悪いのか、単純に端末部の電源が落ちて
いるだけなのか……こういう時にこそメカニク機械工なりアーティスト芸術家なりの出番
なのだが、生憎と此処に居るのはハンターが2人だけという有様だ。
だが、俺もかつては“孤高の何でも屋”とまで称された身……戦
闘、調達、修理に料理、しまいにや多少なりとは言えく大破壊>前
の科学技術にハッキング能力まで。
グランドノス

不本意ながら怨敵の手により学習装置的なナニカで脳髓に強制的
に叩き込まれたものもあるが、それを差し置いても並のハンターを
凌駕する努力と学習を重ねてきた自負がある。
テストメント

本職メカニクのディーブかつコアでマニアックな知識や技術に
は劣るものの、転送装置の不調の原因を探るなど訳もないのだ!

……誰だ、今「孤高」ぼっちの代名詞だろう」とか思った奴は!
俺にだってなあ! 仲の良い自称美しきアーティスト芸術家とか、ナース看護師のく

せに副業で情報屋なんてやってる奴とか、ホホアナで知り合った飲み仲間とか……あれ？ よく考えれば、俺の考えてる交友関係って……い、いや、気のせいだ。これ以上は考えないぞ！

「どしたの？ 手が止まってるけど」

「……な、何でも無いぞ。さて、ちょっと整備パネルを開くから周辺の警戒を頼むな？」

「はいはい……ま、これで脱出できれば良いんだけどね」

暫時、ろくでも無い事で考え込んでしまった空白を取り戻すかのように、俺は原因究明へと集中する事にしたのだった。

まあ結局は、本当に制御端末の電池切れだったのだが……どうやら適合する規格が出力最優先のテスラセル系ではなく、装置に必要なのは長期間に渡り一定レベルの電力維持が可能なく原子力電池>だったので、残念ながら手持ちのテスラセルではどうしようもなく、島内のどこかに原子力電池の予備が無いか（神にでも祈りつつ）探さなければならぬという事が判明しただけだった。

（むう、もしかすると本当に島で暮らすか、ブレード・トゥースの臂力にモノを言わせて遠泳をする破目になるやもしれんな……）

この後の展開を考えると頭痛しかしてこないが、今の所は本当にどうしようもないために、俺とレナは再び調査を再開する事にしたのであった。

18話 くものいと……なのか？（後書き）

・このままグロウインか、それとも島内探索に戻るのか……それが問題だw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5515z/>

3 2 R 紅き牙獅子は転送事故に啼く

2012年1月14日23時18分発行